

Title	古墳時代政權交替論の考古学的再検討
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13079
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈付載 1〉

長尾山古墳発掘調査報告書

(2010年3月刊行)

長尾山古墳発掘調査報告書

2010年3月

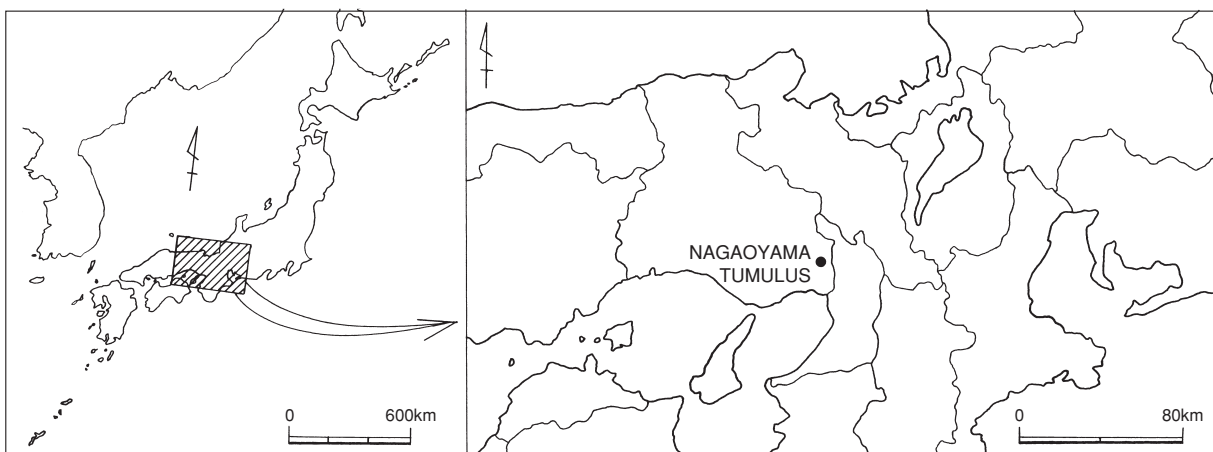
大阪大学文学研究科考古学研究室



後円部 2009 調査区 (北から)

例 言

- 1 本書は兵庫県宝塚市山手台東1丁目4-424（旧宝塚市切畑字長尾山）に所在する長尾山古墳の発掘調査成果を報告したもので『長尾山古墳発掘調査報告書』（宝塚市教育委員会 2010）の別刷である。
- 2 第2次調査は、墳丘の範囲や基本的な情報を得るために国費、県費の補助を受けて宝塚市教育委員会が主体となって実施した。調査は宝塚市教育委員会社会教育課長直宮憲一、同主任吉田健一が担当し、調査指導として大阪大学文学研究科教授福永伸哉、同准教授高橋照彦、同助教寺前直人が参加した。現地調査の期間は2008年8月27日～9月28日の約1月間である。第4次調査は、第2次調査にひきつづき墳丘範囲を確定させるために国費、県費の補助を受けて宝塚市教育委員会が主体となって実施した。調査は宝塚市教育委員会社会教育課主任吉田健一、同直宮憲一が担当し、調査指導として大阪大学文学研究科教授福永伸哉、同准教授高橋照彦、同助教寺前直人が参加した。現地調査の期間は2009年8月31日～9月26日の約1月間である。
- 3 長尾山古墳の全体的な理解を助けるために、本書には、第2次、第4次調査とほぼ同時期に大阪大学考古学研究室によって行われた第1次、第3次、第5次発掘調査の成果の概要も収載している。
- 4 出土資料の整理分析および本書の作成作業は、宝塚市教育委員会と大阪大学が連携しながら、大阪大学考古学研究室において行った。
- 5 現地調査、整理分析作業の参加者名は第1章に記す。写真撮影は、遺構を寺前、福永、遺物を寺前が担当した。製図の分担は挿図目次に示した。
- 6 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、北方位は座標北を示す。
- 7 本書の執筆は吉田、福永、寺前のほかに、大阪大学文学研究科博士後期課程中久保辰夫、同前期課程金澤雄太、森暢郎、木村理恵（奈良文化財研究所）、高上拓（高松市教育委員会）、酒井将史（奈良県立橿原考古学研究所）、野島智実（鳥取県埋蔵文化財センター）、前田俊雄（大阪府文化財センター）が分担して行い、担当箇所は目次および執筆箇所の末尾に記した。編集作業は、宝塚市教育委員会と大阪大学が協力して行い、全体のとりまとめを福永が担当した。



遺跡位置図

長尾山古墳発掘調査報告書

目 次

巻頭図版

例 言

第1章 調査経過	1
1 周辺の古墳	中久保辰夫 1
2 調査経過	福永伸哉・吉田健一 3
第2章 調査成果	6
1 墳丘の現状と測量調査の成果	野島 智実 6
2 トレンチの配置	寺前 直人 6
3 後円部の調査	10
(1) 後円部2007-1 トレンチ	木村 理恵 10
(2) 後円部2007-2 トレンチ	木村 10
(3) 後円部2007-3 トレンチ	高上 拓 10
(4) 後円部2007-4 トレンチ	高上 10
(5) 後円部2008トレンチ・2009調査区	森 暢郎 10
4 南クビレ部の調査	13
(1) 南クビレ部第1・第2 トレンチ	寺前 13
(2) 南クビレ部2008調査区	前田 俊雄 13
5 前方部の調査	14
(1) 前方部2008-1 トレンチ	酒井 将史 14
(2) 前方部2008-2 トレンチ、2009-1・2 トレンチ	金澤 雄太 18
(3) 前方部2009-3 トレンチ	金澤 20
6 墳頂部の調査	中久保 22

7 墳丘の復元	寺前	23
第3章 出土遺物		25
1 埴輪	金澤	25
2 土師器	中久保	33
第4章 調査のまとめ	福永・吉田	35

図 版 目 次

巻頭図版 後円部2009調査区（北から）

- 図版 1
- 1 上空から見た長尾山古墳（南から）
 - 2 長尾山古墳と西摂平野（北から）
 - 3 長尾山古墳遠景（南から）

- 図版 2
- 1 後円部2007-1 トレンチ（南から）
 - 2 後円部2007-2 トレンチ（南西から）
 - 3 後円部2007-4 トレンチ（北西から）
 - 4 後円部2007-3 トレンチ（北西から）

- 図版 3
- 1 後円部2009調査区全景 1（東から）
 - 2 後円部2009調査区全景 2（東から）
 - 3 後円部2008 トレンチ（東から）
 - 4 後円部2009調査区（南東から）

- 図版 4
- 1 南クビレ部2008調査区全景 1（東から）
 - 2 南クビレ部2008調査区全景 2（南から）

- 図版 5
- 1 南クビレ部2008調査区全景 3（南東から）
 - 2 南クビレ部2008調査区における埴輪列検出状況（東から）

- 図版 6
- 1 前方部2008-1 トレンチ全景 1（南東から）
 - 2 前方部2008-1 トレンチ全景 2（南から）

- 図版7 1 前方部2009-1・2トレンチ（左：1トレンチ、右：2トレンチ、東から）
2 前方部2009-2トレンチ全景1（北から）
3 前方部2009-2トレンチ全景2（北西から）
- 図版8 1 前方部2009-3トレンチ全景1（南から）
2 前方部2009-3トレンチ全景2（南西から）
- 図版9 1 墳頂2009調査区全景（南から）
2 墳頂2009調査区で検出された小礫群（樹木移植前：北西から）
- 図版10 1 陥没坑に落ち込んだ小礫群（南から）
2 小礫群除去後の陥没坑（南から）
3 墓壙掘形と埋土の状況（南から）
4 陥没坑土層断面（北から）
5 陥没坑における土師器の出土状況
- 図版11 1 埴輪（口縁部・頸部・胴部）外面
2 埴輪（口縁部・頸部・胴部）内面
- 図版12 1 埴輪と土師器（42）の外面
2 埴輪（底部）外面
- 図版13 1 埴輪と土師器（42）の内面
2 埴輪（底部）内面
- 図版14 1 埴輪（口縁部・頸部）外面
2 埴輪（胴部・底部）外面
- 図版15 1 埴輪（口縁部・頸部）内面
2 埴輪（胴部・底部）内面
- 図版16 埴輪（底部）

挿 図 目 次

遺跡位置図（金澤製図）	iii
図1 周辺の古墳分布図（中久保製図）	2
図2 長尾山古墳の位置（森製図）	3
図3 調査のひとこま	4
図4 1969年の測量図（『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集より）	6
図5 長尾山古墳の墳丘測量図（中久保製図）	7
図6 長尾山古墳調査区配置図（中久保製図）	8
図7 後円部2007-4 トレンチ平面・立面・土層断面図（高松 由製図）	11
図8 後円部2009調査区平面・土層断面図（森製図）	12
図9 南クビレ部2008調査区平面・立面・土層断面図（酒井製図）	15・16
図10 前方部2008-1 トレンチ平面・立面・土層断面図（森製図）	17
図11 前方部2009-1・2 トレンチ平面・立面・土層断面図（金澤製図）	19
図12 前方部2009-3 トレンチ平面・立面・土層断面図（仲辻 慧大製図）	21
図13 墳丘形態の復元（中久保製図）	24
図14 長尾山古墳出土埴輪実測図1（金澤・酒井・山中 良平製図）	27
図15 長尾山古墳出土埴輪実測図2（金澤・酒井・山中製図）	29
図16 長尾山古墳出土埴輪実測図3（金澤・酒井・山中製図）	31
図17 長尾山古墳出土埴輪実測図4（酒井・山中製図）	32
図18 長尾山古墳出土土師器実測図（中久保製図）	34
図19 長尾山古墳出土土師器写真	34

表 目 次

表1 調査区名称対応表	9
-------------	---

第1章 調査経過

1 周辺の古墳

長尾山古墳が所在する西摂地域は、現在の兵庫県東南部と大阪府北西部にまたがり、北部に北摂山地が、南部は大阪湾に面する西摂平野が広がる（図版1）。平野の西側には武庫川が、中部には猪名川が南流し、これらの流域には数多くの古墳が築造されている（図1）。ここでは武庫川と猪名川にはさまれた長尾山丘陵を中心に、周辺の古墳を時期ごとに概観したい。

古墳時代前期には、おおむね前期後葉から西摂地域各地に古墳の築造が認められると考えられてきた。丘陵に目をむけると、長尾山丘陵に宝塚市長尾山古墳（1）、同万籟山古墳（前方後円/54m:2）が築かれ、池田市域にあたる五月山丘陵には池田茶臼山古墳（前方後円/62m:26）、娯三堂古墳（円/27m:22）が、待兼山丘陵にも豊中市待兼山古墳（前方後円？/不明:44）と同麻田御神山古墳（前方後円？/不明:50）が築造される。同様に、台地上や平野部においても、豊中台地には桜塚古墳群のうち大石塚古墳（前方後円/76m:56）、小石塚古墳（前方後円/49m:57）、嫁廻塚古墳（円/30m:68）が、武庫川左岸平野部には宝塚市安倉高塚古墳（円？/不明:13）が、伊丹市から尼崎市にかけての猪名川中流域平野部には猪名野古墳群のうち上臈塚古墳（前方後円/70m?:79）、池田山古墳（前方後円/71m:88）などの古墳が築かれる。

このように、各地に前期前方後円墳の築造が認められるが、今回の調査が始まる以前は長尾山古墳のみが前方後円墳の可能性が高いと考えられてきた。また、その所属時期にかんしても、前期後葉とする説（櫃本1971、森岡・吉村1992、福永2004）と中期初頭に位置づける説（橋本1975）があり、評価が定まっていなかった。

古墳時代中期には、前期と一転して、前方後円墳や大型円墳といった有力古墳の築造は、豊中台地における桜塚古墳群や猪名川中流域の猪名野古墳群に限られるようになる。桜塚古墳群では、豊中大塚古墳（円墳/56m:61）、御獅子塚古墳（前方後円/55m:62）、狐塚古墳（前方後円/不明:64）、北天平塚古墳（前方後円/30～35m:65）、南天平塚古墳（円/20m:66）の順に連綿と有力古墳が築造されている。同様に、猪名野古墳群においても中期には御願塚古墳（前方後円/52m:84）、御園古墳（前方後円/60m:90）、南清水古墳（前方後円/46m:86）が築かれている。こうした築造状況の中、長尾山丘陵において長尾山古墳が中期に築造されているとすれば、桜塚古墳群や猪名野古墳群との関係を検討する必要性が生じる。そのため、この地域の首長墳系列を考えるうえで、長尾山古墳の時期的な位置づけが問題となるのである。

古墳時代後期になると桜塚古墳群が衰退する一方、それまでしばらく有力古墳の築造がみられなかった長尾山丘陵や五月山丘陵にふたたび前方後円墳があらわれる。長尾山丘陵においては、後期前半に川西市勝福寺古墳（前方後円/41m:16）が出現し、後期後半には、雲雀丘古墳群（12）など丘陵斜面の尾根沿いに約200基以上から成る群集墳が形成される。五月山丘陵南麓では横穴式石室2基を内

2 周辺の古墳



- | | | | | |
|--------------|--------------|------------------|--------------|----------------|
| 1 長尾山古墳 | 20 木部桃山遺跡 | 39 新稲古墳 | 57 小石塚古墳 | 76 田能遺跡第2号 |
| 2 万籟山古墳 | 21 紅葉古墳 | 40 桜古墳 | 58 桜塚古墳 | 77 緑ヶ丘古墳群 |
| 3 中山荘園古墳 | 22 娯三堂古墳 | 41 中尾塚古墳 | 59 荒神塚古墳 | 78 荒牧古墳 |
| 4 中山寺白鳥塚古墳 | 23 娯三堂南古墳 | 42 稲荷社古墳 | 60 小塚古墳 | 猪名野古墳群(79-91) |
| 5 中筋山手古墳群 | 24 城山古墳 | 43 太鼓塚古墳群 | 61 豊中大塚古墳 | 79 上臈塚古墳跡 |
| 6 中筋山手東古墳群 | 25 池田城下層 | 44 待兼山古墳 | 62 御獅子塚古墳 | 80 有岡城遺跡(204次) |
| 7 山本古墳群 | 26 池田茶白山古墳 | 45 待兼山2号墳 | 63 出雲塚古墳 | 81 鶴塚岩古墳跡 |
| 8 山本奥古墳群 | 27 五月ヶ丘古墳 | 46 待兼山3号墳 | 64 狐塚古墳 | 82 南本町遺跡古墳群 |
| 9 平井古墳群 | 28 宇保稲津彦神社古墳 | 47 待兼山4号墳 | 65 北天平塚古墳 | 83 猪名寺廃寺 |
| 10 雲雀丘西尾根古墳群 | 29 脇塚古墳 | 48 待兼山5号墳 | 66 南天平塚古墳 | 84 御願塚古墳 |
| 11 雲雀丘東尾根古墳群 | 30 鉢塚古墳 | 49 石塚古墳 | 67 女塚古墳 | 85 園田大塚山古墳 |
| 12 雲雀丘古墳群 | 31 二子塚古墳 | 50 麻田御神山古墳 | 68 嫁廻塚古墳 | 86 南清水古墳 |
| 13 安倉高塚古墳 | 32 善海1号墳 | 51 金寺山廃寺(1次) | 69 桜塚38号墳 | 87 食満塚古墳 |
| 14 豆坂古墳群 | 33 善海2号墳 | 52 新免宮山古墳群 | 70 桜塚39号墳 | 88 池田山古墳 |
| 15 萩原古墳群 | 34 野田塚古墳 | 53 新免古墳群 | 71 桜塚42号墳 | 89 柏木古墳 |
| 16 勝福寺古墳 | 35 狐塚古墳 | 54 山ノ上遺跡(10・14次) | 72 桜塚43号墳 | 90 御園古墳 |
| 17 小戸遺跡 | 36 石橋古墳 | 桜塚古墳群(55-73) | 73 桜塚44号墳 | 91 伊居太古墳 |
| 18 木部1号墳 | 37 宮ノ前古墳群 | 55 御位塚古墳 | 74 利倉南遺跡(1次) | (非古墳) |
| 19 木部2号墳 | 38 豊島南遺跡 | 56 大石塚古墳 | 75 田能遺跡第1号 | |

図1 周辺の古墳分布図

包する二子塚古墳（前方後円/45m:31）が後期前半に築造され、後期後半には大型横穴式石室を有する鉢塚古墳（円/45m:30）がつづく。古墳時代終末期においては、各地における古墳築造が終焉を迎えていく中で、長尾山丘陵には刳拔式家形石棺をもつ中山寺白鳥塚古墳（不明/不明:4）や八角形の墳丘プランを呈する国史跡の中山荘園古墳（八角/14m:3）が築造される。

以上のように、北摂西部地域における古墳の築造状況には、時期によって小地域ごとに特徴的な変化が認められ、古墳の時期や墳形、規模は当地域における有力者の政治的な動向を考える上で重要な情報となる(福永2004)。 (中久保辰夫)

2 調査経過

長尾山古墳は、1957年に石野博信氏と関西学院大学考古学研究会メンバーによる長尾山丘陵の分布調査で「発見」され、はじめて学界にその存在が知られることになった(石野1986)。その後、1969年には櫃本誠一氏の指導のもとに宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会によって墳丘測量調査が行われ、前期の前方後方墳である可能性が指摘された(櫃本1971)。当古墳から北東1kmの地点には、学史的にも著名な摂津万籟山古墳が存在しており、それとの関係も注目された。

この長尾山丘陵では1970年代ごろから大規模な宅地造成の計画が進んだ。宝塚市では一部の後期古墳群については、奈良大学などの応援を得て開発に先立つ事前調査を実施するなどの対応をはかっていたが(森本1992)、長尾山古墳は有力首長古墳としての特段の重要性にかんがみ、1992年に古墳が位置する尾根を取り込む形で都市公園を設けることにより、現状のまま保存することとなった。

その後1990年代後半には、経済環境の変化もあって一時宅地造成のペースは鈍化したが、2000年頃からふたたび開発の動きが活発になるにつれて、古墳周辺を散策する市民も増え、古墳の範囲確認、墳丘の保護、文化財としての周知などが、対応を要する現実的な課題として浮上してきた。

いっぽう、2000年から猪名川流域をフィールドとして古墳時代史の研究を進めてきた大阪大学考



図2 長尾山古墳の位置

4 調査経過

古学研究室は、長尾山古墳の実態解明が地域の首長系譜分析にとって重要な課題であると位置づけ、2007年にこの古墳に対するはじめての発掘調査を行った。その結果、長尾山古墳が葺石、埴輪をもつ前期前半の古墳で、墳形も前方後円墳である可能性が非常に高いことがわかり、この古墳の重要性をあらためて認識させることとなった（福永編2008）。

以上のような状況をうけて、宝塚市教育委員会では長尾山古墳の範囲、築造時期、墳形などの確認が文化財行政のうえからも不可欠と考え、国費、県費の補助を受けて今回の発掘調査を計画した。大阪大学においても、2008年から新たに科学研究費補助金（課題名：古墳時代政権交替論の考古学的再検討、研究代表者：文学研究科教授福永伸哉）を獲得して、学術面から長尾山古墳の解明を継続することになり、おもに墳頂部を中心として発掘調査を行うこととした。

市教委、阪大の調査は2008年、2009年の2ヶ年にわたってそれぞれ8月～9月にかけて同時期に実施された。埋蔵文化財行政としての調査と大学による研究目的の調査が並行する形になったが、双



図3 調査のひとこま

方は密接な協力の下に共同調査としてのメリットが生かせるようにはかった。なお、調査次数の呼称としては、2008年度の市教委主体のものを第2次、阪大主体のものを第3次、2009年度の市教委主体のものを第4次、阪大主体のものを第5次、さらに2007年度に阪大が行った調査を第1次としている。

市教委による第2次、第4次調査は、墳丘各所にトレンチを入れる方法で古墳の規模、墳形、埴輪列の状況などを検討した。とりわけ、第2次調査の南クビレ部調査区では前方部から後円部に連続する基底石の並びが良好な状態で検出され、これにより本墳が前方後円墳であることが確実となったのは大きな成果であった。また、第4次調査で墳丘北側斜面でも比較的残存状況のよい部分があることが判明したことは、今後の墳丘保全策を講ずる際の参考になる。阪大による第3次、第5次調査では、墳頂部で木棺の陥没による可能性がある小礫混じりの窪みと墓壙掘形のラインを確認したが、樹木保護の関係で一部調査範囲が限られたため、埋葬施設の残存状況にかんする全容解明は今後の課題として残された。

2008年度は9月18日に記者発表、23日に現地説明会をいずれも共同で実施し、現地説明会には約250名の参加を得るなど、市民の関心の高さがうかがわれた。2009年度も同様に9月15日に記者発表、19日に現地説明会を催し、約150名の参加があった。この間、2008年9月、2009年9月には市長、教育長、宝塚市文化財審議委員会による現地視察があった。また2007年度以降、大阪大学の教員の援助を得て、市域の古墳文化にかんする講演会を毎年実施し、調査成果の社会的活用に取り組んでいる。なお、毎年の現地調査の進行状況は、大阪大学によって毎日インターネットのサイトで公開され、閲覧した市民が現地説明会に参加されるなど周知効果を得ている。

出土遺物や調査記録の整理分析は、市教委、大阪大学が共同で進めており、すでに市教委、阪大のそれぞれが1冊ずつの調査概報を刊行している（福永編2008・2009）。本報告書は、これらの成果を再整理するとともに、2009年度調査の成果を加えて、現時点までに判明した長尾山古墳にかんする文化財的、学術的情報をとりまとめたものである。

第2～5次の現地調査及び資料整理作業の参加者は次の通りである。奥村茂輝、中久保辰夫（文学研究科博士後期課程）、酒井将史、前田俊雄、野島智実、金澤雄太、森暢郎（文学研究科博士前期課程）、大川沙織、岡本晋輔、露原有紗、古谷暢也、川村奈央子、島田翔、高松由、仲辻慧大、平木優吾、向川侑大、山中良平、上地舞、北原梨江、城内龍一、藤城光、安藤祥子、後藤俊介、竹内祐貴、橘泉、辻奈緒、三好裕太郎、上田直哉、佐伯郁乃（文学部）、横地勲（文学部科目等履修生）、下村健吾、安田智一（理学部）、齋藤啓子（神戸女学院大学）、嶋圭太（高知大学）、木村龍之介（京都大学）、西垣遼（流通科学大学）、ロラン・ネスプルス（パリ第一大学原史時代研究所・東洋言語文明学院）。

調査の実施にあたっては、兵庫県教育委員会、文化庁から全般的な指導をいただいたほか、来訪された多数の専門研究者からも有益な教示を賜った。地元の山手台東自治会、里山整備活動グループ「櫻守の会」、阪急不動産株式会社山手台開発事業部からは、円滑な調査の実施にかんしてご理解とご協力を得た。また、調査団の宿舎となった宝塚市小浜では小浜自治会のお世話になった。このほかにも、多くの方々の支えを得て調査が行われたことをここに記し、感謝の意を表したい。

（福永伸哉・吉田健一）

第2章 調査成果

1 墳丘の現状と測量調査の成果

長尾山古墳は、西摂平野を見下ろす長尾山丘陵の南側斜面尾根上に所在する。近年、周囲の宅地化が急速に進み、現在、古墳は宝塚市山手台東1丁目にある山手台南公園の一角にとりつく形となっている。

墳丘西部には丘陵下から公園へ登る道や排水溝が敷設されている。また丘陵尾根を南東方向へ少し下った平坦地には東屋が設置され、墳丘裾北側を通る遊歩道が東屋と公園を結ぶ。遊歩道よりも北側は急勾配の崖となり、深い茂みに覆われている。

長尾山古墳のこれまでの調査として、はじめに1969年に行われた宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会による測量調査がある(図4)。その成果は調査を指導した櫃本誠一氏によって1971年に報告された(櫃本1971)。氏は測量調査を通じて、長尾山古墳は墳長36mの前方後方墳であると想定した。またこの時点では、後方部において粘土槨が露出していると述べられている。

その後、2007年には大阪大学考古学研究室が測量調査を行った(福永編2008)。この調査では、1971年報告の段階から、古墳の形状自体は大きく変わっていないことが確認された。(図5)。ただし、南北のクビレ部に相当する辺りから西へ伸びる等高線が、標高116.5m付近から119.0mにかけて、緩やかな弧状を描いている様子が窺われた。特に南側は樹木も少なく、墳丘の残存状況は比較的よいと

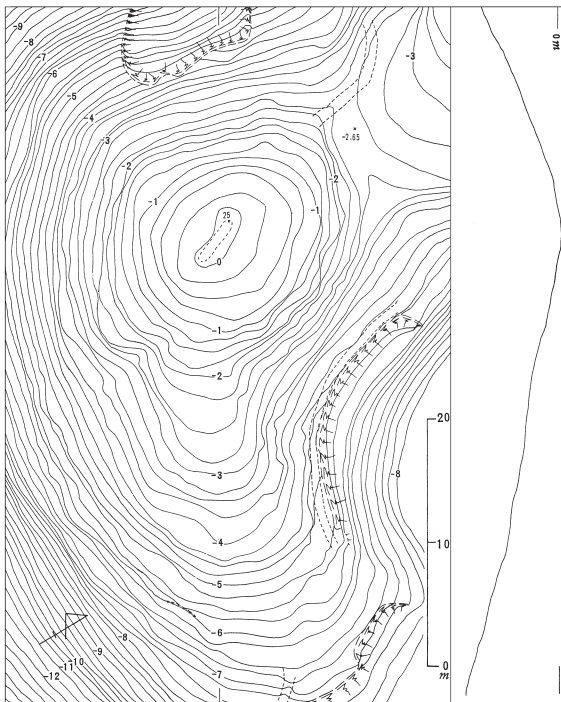


図4 1969年の測量図
(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集より)

推定された。また墳丘主軸にかんしては、古墳の規模しだいでは東屋や排水溝によって墳丘が削平を受けている事態も想定された。しかしその一方で、前方部側では標高116.0～117.0m付近に石列が露出している部分もあり、これが墳端を示している可能性も考えられた。

また1971年に報告されている墳頂部の粘土槨の露出は、2007年の測量調査の段階では確認できなかった。墳頂部には設置者が不詳の測量用コンクリート杭が2カ所埋設されている。埋葬施設への影響や埋葬施設の残存状況の確認も今後の課題として認識された。(野島智実)

2 トレンチの配置

大阪大学によって実施された2007年の第1次調査を含めて、長尾山古墳における調査区の配置を

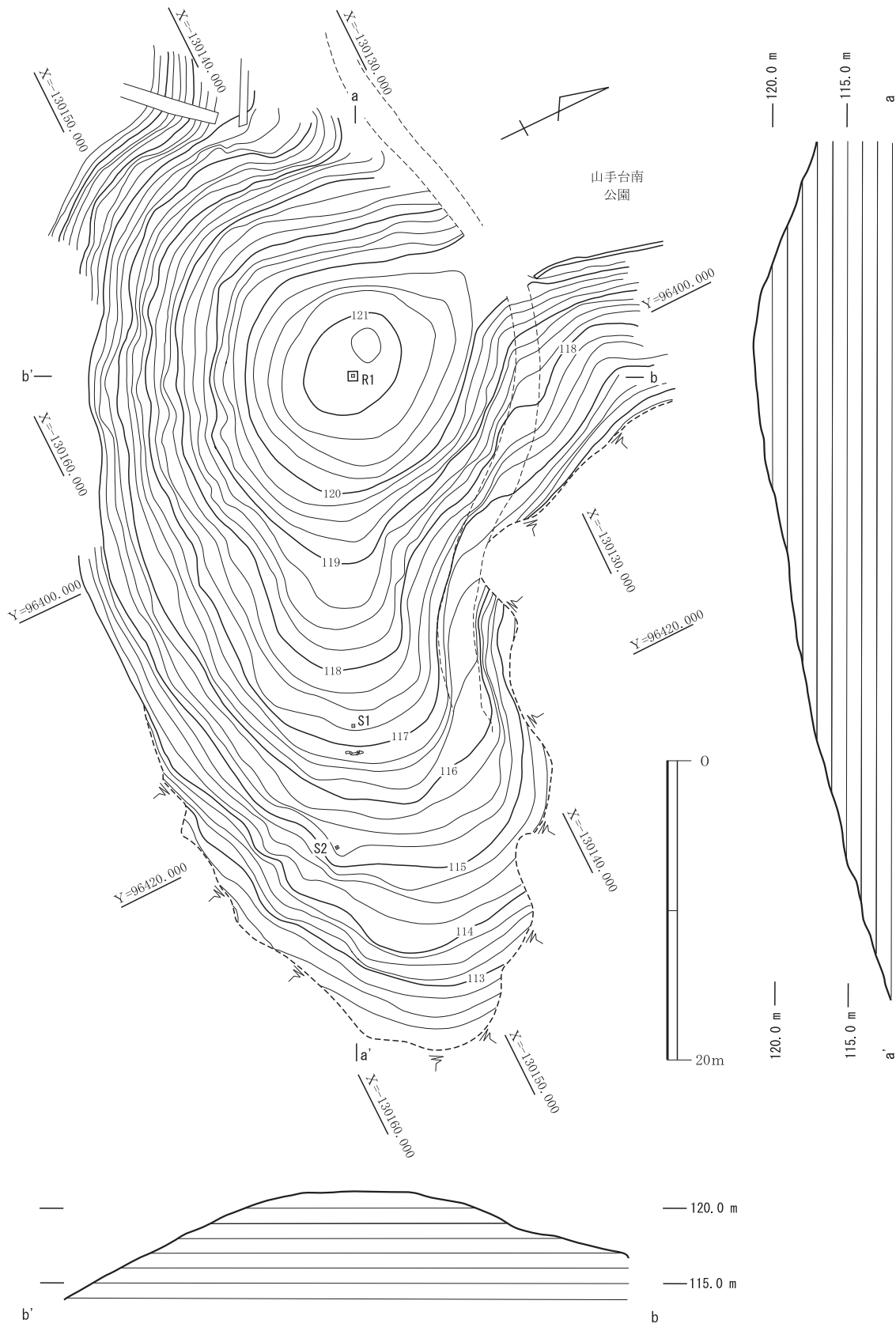


図5 長尾山古墳の墳丘測量図

8 トレンチの配置

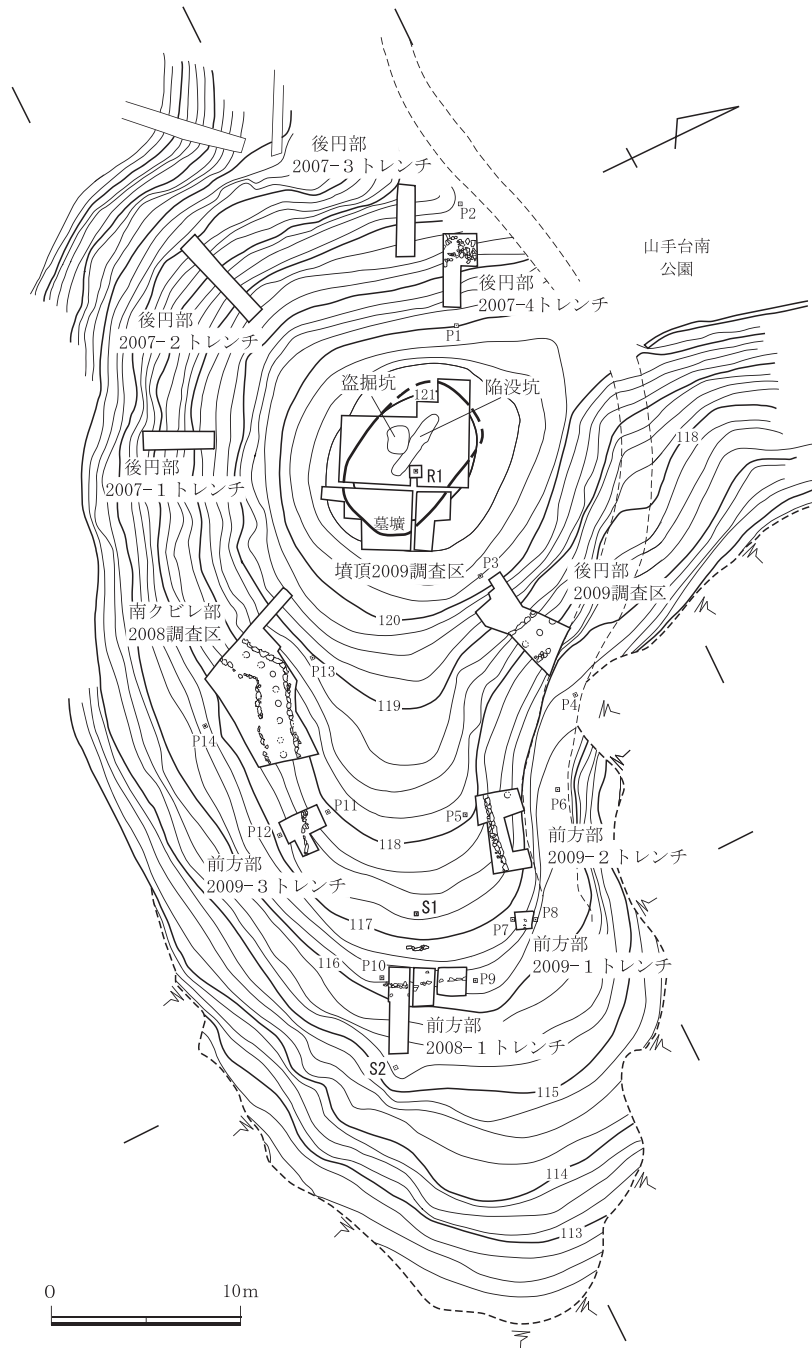


図6 長尾山古墳調査区配置図

示しておきたい(図6)。

まず、後円部墳丘では合計5ヶ所で掘削を実施した。第1次調査では墳丘主軸上に2ヶ所(後円部2007-3・4トレンチ)、墳丘主軸に直交する南西斜面に後円部2007-1トレンチ、そしてこれらの間に後円部2007-2トレンチを設定した。2008年(第2次調査)には、墳丘北側に後円部2008トレンチを設けた。ここでは葺石と埴輪列が検出されたことから、これらのさらなる検出を目的として2009年(第4次調査)には掘削範囲を拡張し、後円部2009調査区とした。

また、第1次調査において埴輪と葺石が検出された南クビレ部第1トレンチと第2トレンチの間をつなげる形で、第2次調査では南クビレ部2008調査区を設けた。さらに第4次調査では、この調査

区より前方部側に前方部2009-3トレンチを設定した。前方部前面においては、墳丘前端部を確定させるために第1次調査において墳丘主軸上に前方部第1トレンチを設定し、第2次調査ではこれを拡張して前方部2008-1トレンチを設けた。

また、同じく第2次調査では前方部北側斜面にも前方部2008-2トレンチを設け、葺石列を確認した。そこで葺石列の延長方向を追求するため、第4次調査においてこれを拡張し、前方部2009-2トレンチとした。また、さらに前方部前方方向にも小規模な前方部2009-1トレンチを設定した。

なお、後円部墳頂部においては、2008年（第3次調査）と2009年（第5次調査）に調査区を設け、埋葬施設上面の状況を追求した。

2007年に始まった一連の発掘調査にかんしては、これまでに2冊の発掘調査概報を刊行しているが、調査の進行に伴って調査区の呼称を変更した部分がある。以下に、その対応関係を整理しておく。

(寺前直人)

表1 調査区名称対応表

第1次概報（2008年刊行）	第2次・第3次概報（2009年刊行）	発掘調査報告書（本書）
後円部第1トレンチ		後円部2007-1トレンチ
後円部第2トレンチ		後円部2007-2トレンチ
後円部第3トレンチ		後円部2007-3トレンチ
後円部第4トレンチ		後円部2007-4トレンチ
	後円部2008-1トレンチ	後円部2008トレンチ 後円部2009調査区
西クビレ部第1トレンチ 西クビレ部第2トレンチ	西クビレ部2008調査区	南クビレ部第1トレンチ 南クビレ部第2トレンチ 南クビレ部2008調査区
前方部第1トレンチ	前方部2008-1トレンチ 前方部2008-2トレンチ	前方部2009-1トレンチ 前方部2009-2トレンチ 前方部2009-3トレンチ

3 後円部の調査

(1) 後円部2007-1トレンチ (図版2-1)

墳丘の堆積状況および墳丘南西の墳端を検出することを目的として、墳丘主軸にほぼ直交する位置に設定した長さ3.8m、幅1.0mのトレンチである。葺石およびテラス面が検出できる可能性を想定していた。掘削を進めた結果、表土下から礫を含む流土層が認められたが、テラス面は確認できず、表土下約0.2mで地山が検出された。急斜面であるため、当初の墳丘面が流出したと考えられる。埴輪および葺石も確認されていない。

(木村理恵)

(2) 後円部2007-2トレンチ (図版2-2)

墳丘の堆積状況および墳丘の基底ラインを検出することを目的として、東西方向に設定した長さ5.3m、幅1.0mのトレンチである。表土下より礫を含む流土層が確認できたものの、現位置をとどめる葺石やテラス面は検出できなかった。

(木村)

(3) 後円部2007-3トレンチ (図版2-4)

次に述べる後円部2007-4トレンチと同じく後円部側の墳端を明らかにするために設定したトレンチである。墳丘主軸に沿って長さ3.8m、幅1.0mをはかる。調査の結果、墳端を確定することはできず、明瞭な葺石の残存を確認することもできなかった。ただし、調査区下端の標高117.0m付近から深さ0.6m程度の落ち込み状の遺構を検出した。調査範囲が及ばず、遺構の性格や規模などは不明である。埋土中より埴輪片が出土している。

(高上 拓)

(4) 後円部2007-4トレンチ (図7、図版2-3)

後円部の墳端を確認し、古墳の全長を明らかにすることを目的として設定したL字状のトレンチである(図7)。長さ4.9m、幅が東側で1m、西側で1.8mの範囲に設定した。調査の結果、墳端にかんする情報は得られなかったが、葺石の残存状況を確認することができた。以下では葺石の検出状況を中心に記述を進める。

トレンチの西側で表土と流土を除去し、さらに0.1mほど掘削すると人頭大から拳大の角礫が標高118.3m～118.7mの範囲より多数検出できた。部分的に礫同士が組み合ったような状態で検出されたため、葺石であると判断した。ただし、検出した葺石の下層から埴輪片が出土しており、二次的な移動により原位置を留めていない可能性が高い。他の後円部側各トレンチとも共通するが、当トレンチでも墳丘土の流出が著しい。こうした流出に伴い葺石全体が原位置から崩落した状況が検出されたものと理解できよう。ただ、礫と礫が密接した状況で検出されていることから(図版2-3)、原位置から大きくは動いていないと判断できる。したがって、礫群の検出位置のやや内側に後円部側墳端を想定できる。

(高上)

(5) 後円部2008トレンチ・2009調査区 (図8、図版3)

本調査区は、後円部東側の外表施設の残存状況を確認するために設定した。2008年度に調査した後円部2008トレンチでは、1段目の葺石とテラス面およびそこに樹立された埴輪列を検出した。詳細にかんしては、長尾山古墳第2・第3次調査概報に掲載している。後円部2009調査区では、後円部

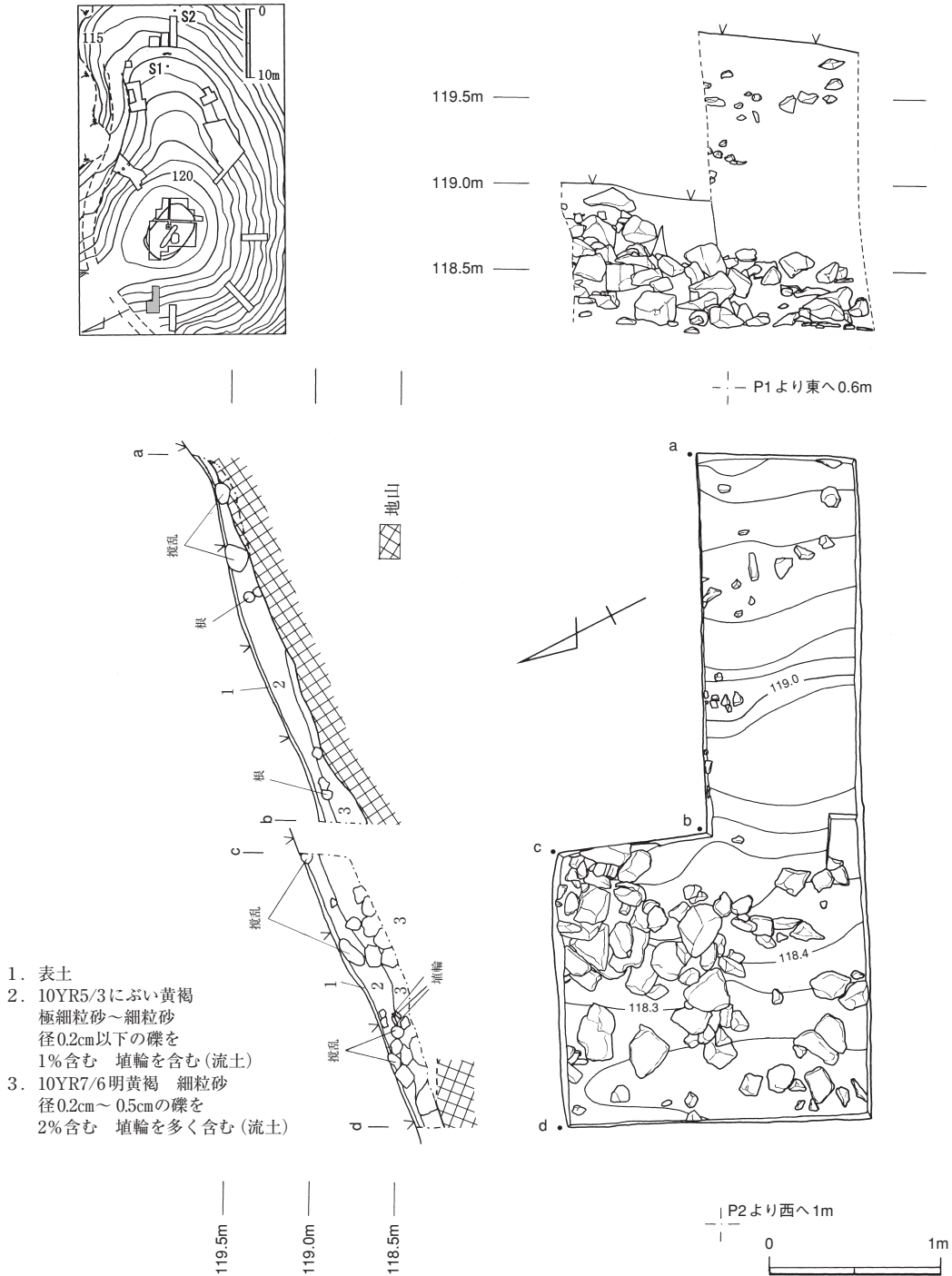


図7 後円部2007-4トレンチ平面・立面・土層断面図

2008トレンチで不明であった2段目葺石以上の構造を追求する目的で、墳頂側に長さ3.4m、幅2.3m拡張した。樹木保護との兼ね合いのため、図8のような調査区の形となった。本報告書では両年度の所見をあわせて記述する。

本調査区では、後円部1段目葺石、2段目葺石、1段目テラス面とそこに樹立された埴輪列、および2段目葺石の上方に長径15cm前後の礫群を検出した。

1段目の葺石は、基底石3石とその上方の1石を確認した。基底石は長径25～30cm程度の石を使用している。1段目テラス面のレベルを勘案すると、南クビレ部2008調査区で検出した1段目と

12 後円部の調査

同じく、高さ0.25m程度の低い葺石斜面であったと考えられる。基底石下端は標高117.4m付近で、南クビレ部調査区の後円部1段目基底石下端よりも0.25m高い。

1段目のテラス面は、幅1.7mで、南クビレ部2008調査区で検出した後円部1段目テラス面よりも約0.5m広い。

樹立埴輪は、1段目テラス面の中ほどに3本検出した。各々の埴輪底部の中心間距離は、南クビレ部2008調査区と同じく約1.0mであるが、2段目葺石基底石から埴輪までの距離が南クビレ部2008調

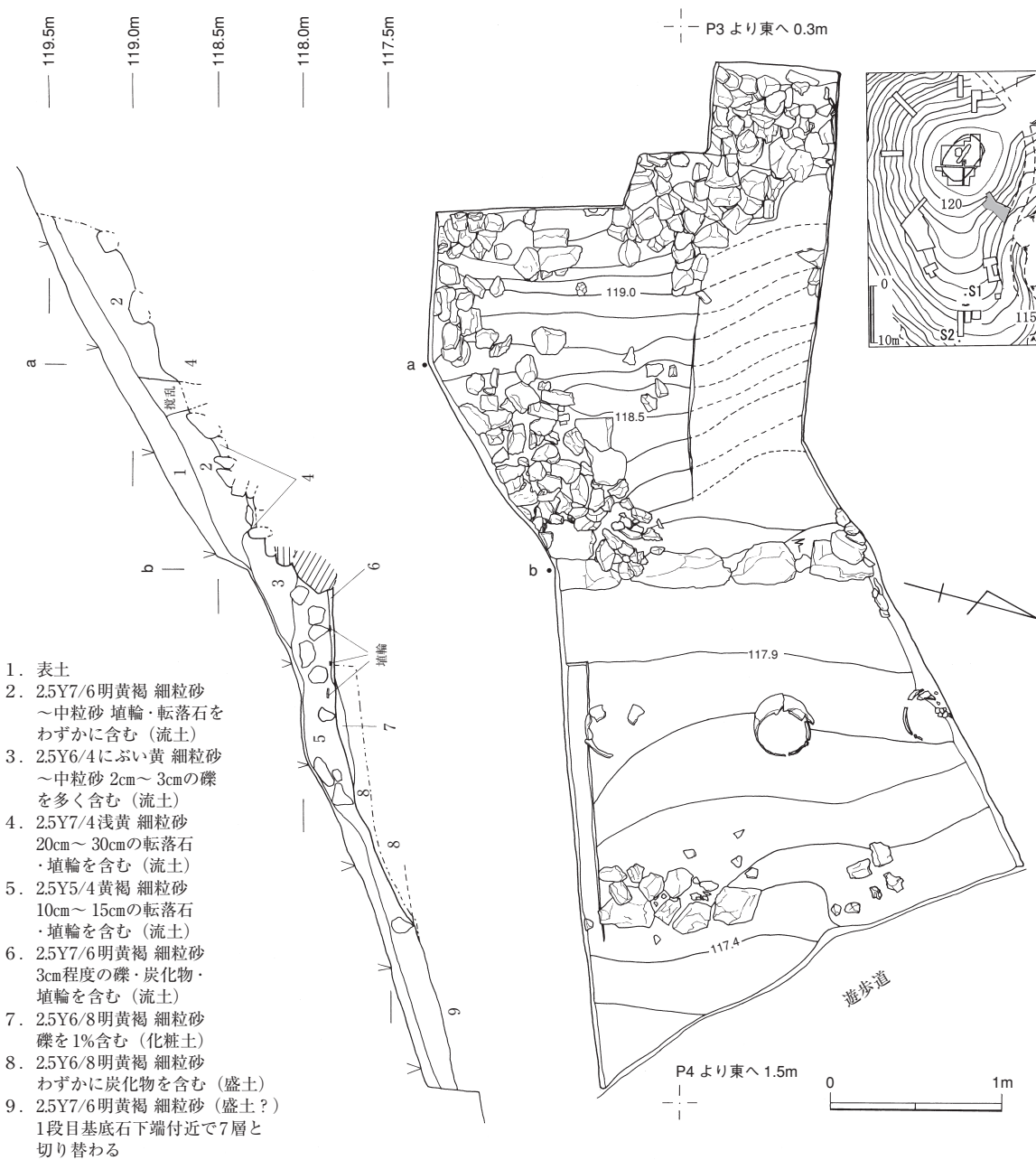


図8 後円部2009調査区平面・土層断面図

査区より約0.4m広がっている。第2・第3次概報でも述べられているが、樹立埴輪は掘形をもたず、底部より5cm程度が「化粧土」で覆われており、南クビレ部2008調査区出土の樹立埴輪と同じ樹立方法をとっている。

2段目の葺石は、調査区中央付近で確認された。基底石は長径50～60cmの石を横使いしており、同じ調査区内の1段目の基底石より大きい。基底石下端の標高は後円部側で約118.0m、前方部側で約117.8mで前方部側にむかって標高が下っており、1段目基底石と同じ傾向にある。また、対称の位置となる南クビレ部調査区の2段目基底石の標高より0.3m高く、埴丘全体が北側に高くなるように築かれている可能性がある。2段目葺石は標高約118.2mまで残存しており、基底石より2石以上積んでいる。傾斜角は約50°である。

2段目葺石上方の礫群には、埴輪片を含む部分と、含まない部分がある。標高119.3m以上にある礫群で、埴輪片を含まない部分は礫が組み合っており、築造当時の葺石である可能性がある。また、2段目葺石よりも標高が高い地点で埴輪片が出土することから、2段目葺石よりも上方でも埴輪が樹立されていた可能性が高い。一部をサブトレンチとして掘り下げたものの、下部の構造ははっきりしなかった。これまでの調査では多くの成果を挙げたものの、3段目の段築の有無など、2段目葺石より上部の構造に不明な点が残った。

(森暢郎)

4 南クビレ部の調査

(1) 南クビレ部第1・第2トレンチ

いずれも2007年の第1次調査において設定したトレンチである。2008年の第2次調査では、両トレンチの間を面的につなげて南クビレ部2008調査区としたので、総括的な内容は次項に記述することとし、ここでは第1次調査におけるごく基本的な所見のみを記す。

2つのトレンチは、前方後方墳か前方後円墳かという埴丘の基本形を確認する目的で設定した。埴丘踏査ならびに測量図に基づき、前方部側には長さ5m、幅1mの南クビレ部第1トレンチを、後方部または後円部側には長さ4.5m、幅1.4mの南クビレ部第2トレンチを設けた。

第1トレンチからは、2段分の葺石と1本の円筒埴輪基底部を検出した。とくに上段で検出された葺石は長径30cm程度の石が直線的に並んでおり、その走行方向から前方部2段目の葺石基底石であると推定できた。第2トレンチからも2段分の葺石と2本の円筒埴輪基底部を検出した。1段目の葺石の残存状況は悪かったが、2段目の葺石基底石は良好に残存していた。これら2つのトレンチで検出された2段目基底石の走行方向からみて、この古墳は前方後円墳である可能性がきわめて高いと判断された。また、埴丘は少なくとも2段の段築成を有し、1段目テラス面には埴輪列が巡ることも判明した。

(寺前直人)

(2) 南クビレ部2008調査区 (図9、図版4・5)

南クビレ部2008調査区は、上述の南クビレ部第1トレンチおよび第2トレンチの間を面的につなげる形で設定した。また、調査区西側ではさらに埴丘上方へ長さ2.3m、幅0.6mの拡張を行った。

調査の結果、1段目および2段目の葺石と埴輪列を良好な状態で検出することができた。まず1段

14 南クビレ部の調査

目の葺石は、基底石下端は後円部側では標高117.2m、前方部側では標高117.0mで後円部から前方部へとなだらかに標高が下がっている。次に述べる2段目葺石の基底石下端の高さなどを参考にすると、墳丘1段目は0.3m程度の低いものとなる。1段目葺石は1石、あるいは2石程度を積んだものであったと考えられる。

2段目の斜面の葺石は1段目と比較するとかなり良好な状態で検出することができた。基底石には最大で長径約50cmと比較的大きな石が用いられており、基底石下端レベルは後円部側では標高117.5m、前方部側では標高117.4mで1段目葺石と同様、後円部から前方部へとなだらかに標高が下がっている。2段目葺石は傾斜角約45°で、調査区内では標高118.3mまで残存している。なお葺石の葺き方は石材の組み合い方からみて、後円部側から前方部側へと葺かれていったことがわかる。

1段目葺石と2段目葺石のあいだには幅1mの平坦面を確認した。この平坦面ではほぼ原位置を保っていると考えられる埴輪列が検出された。1段目のテラス面にあたると思われる。

調査区内では第1次調査でとりあげた1本を含めて、計8本の樹立状態の円筒埴輪を確認することができた。円筒埴輪は底部径が最大でおよそ40cmで、2段目葺石の基底石から南に、後円部側およびクビレ部付近ではおよそ0.3mの位置に、前方部側では0.5～0.7mの位置に樹立している。樹立間隔は中心間の距離で約1mであるが、クビレ部の屈曲点付近では間隔がやや狭まり、0.75mとなっている。後円部2009調査区と同様に樹立埴輪の掘形は認められなかった。

また、2段目のテラス面および3段目葺石の有無を確かめるために、墳丘上方へ長さ2.3m、幅0.6mの拡張を行った。この拡張区ではほかの場所でみられた大量の葺石の転落石が検出されることもなく、テラス面や葺石を検出することはできなかった。しかし、標高118.5m付近に人為的に平坦面を作り出したとも考えられる場所を確認することができた。この場所が2段目のテラス面の痕跡を反映しているとすれば、長尾山古墳の後円部は三段築成であったことになるが、この付近の残存状況がよくないので、確定するには至っていない。(前田俊雄)

5 前方部の調査

(1) 前方部2008-1トレンチ (図10、図版6)

前方部2008-1トレンチは、前方部前線のラインと構造を明らかにすることを目的に設定したトレンチである。第1次調査では、前方部1段目の基底石を検出し埴輪の位置を確認した。そこで第2次調査では、その並びをさらに追求する目的で、第1次調査で検出した基底石から北東方向に長さ4m、幅1.5mのトレンチを設定した。

調査の結果、約4.4mにわたって基底石の連なりを検出した。これによって前方部前線のラインは第1次調査で想定したものよりもやや北側にふれることが判明した。部分的に葺石のラインが乱れる箇所が存在するが、これらは土圧や流水などにより葺石が移動したものと考えられる。また、トレンチ内の南西端の基底石下端の標高は約116.0m、北東端のそれは標高約116.2mであり、約0.2m北東側が高く築かれている。葺石は1～3石残存していた。なお、この葺石の上方には2段目基底石と思われる大振りな石が露出していた。この間の比高差は0.7～0.9mであるため、南クビレ部2008調査

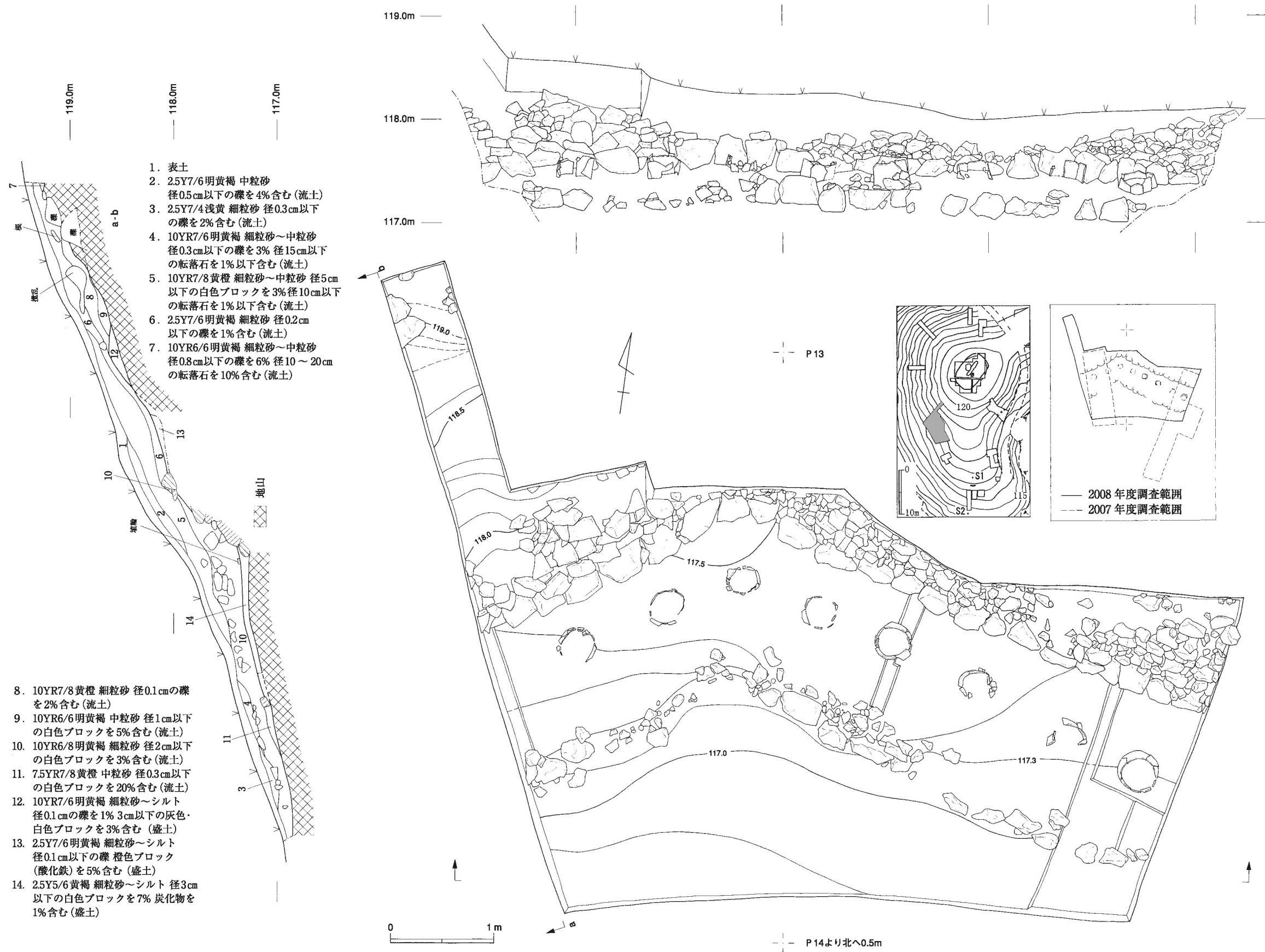


図9 南クビレ部2008調査区平面・立面・土層断面図

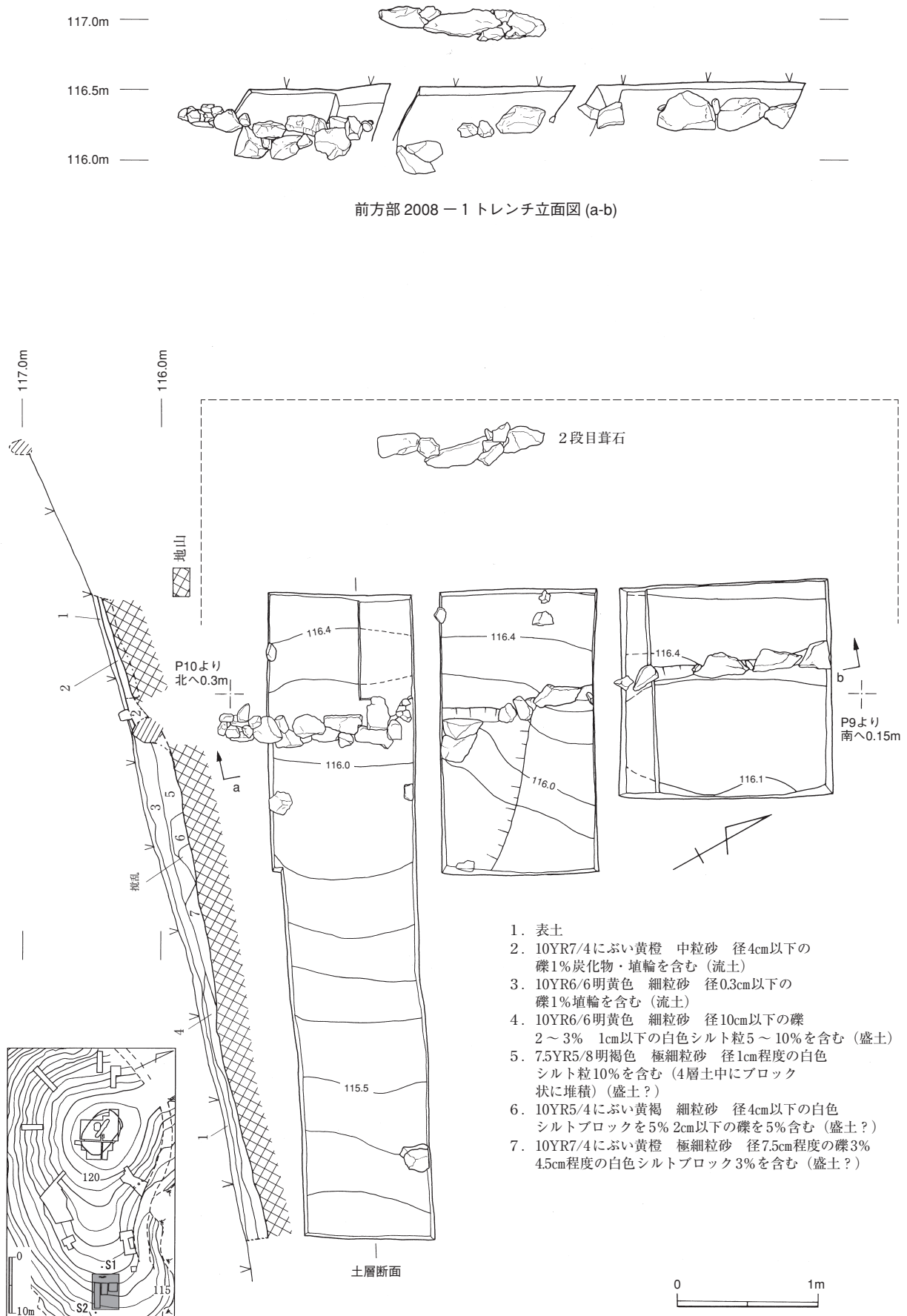


図10 前方部2008 - 1 トレンチ平面・立面・土層断面図

18 前方部の調査

区の所見を参考にすると、1段目葺石は本来はあと数石積み、テラス面に移行していたと考えられる。(酒井将史)

(2) 前方部2008-2、2009-1・2トレンチ (図11、図版7)

前方部2009-1・2トレンチは、前方部2008-2トレンチにおける調査成果をふまえ、前方部北側の詳細な墳丘形態、外表施設の状況を確認するために設定したトレンチである。まず、前方部2008-2トレンチから東へ1.9mのところ、長さ2.0m、幅1.0mの前方部2009-2トレンチを設けたところ、トレンチ南端においてやや大きめの石材の並びを検出した。これらは2008-2トレンチで検出した2段目基底石列の延長上に位置し、石材の大きさも類似することから、原位置を保った2段目基底石列であると判断した。

そこで、この基底石列がどのように延びるかを確認するため、前方部2008-2トレンチにつなげる形で、長さ1.9m、幅1.0mの拡張をおこなった。その結果、拡張した部分においても良好な形で基底石・葺石が残存していることが判明し、2008年度とあわせて全体で約4.1mにわたる2段目基底石・葺石およびテラス面を検出することができた。1段目の葺石にかんしては昨年度と同様に墳丘の残存が悪く、その痕跡すら確認することはできなかったが、このトレンチの成果により、前方部北側の開き具合をほぼとらえることができたといえる。次に検出した葺石の詳細を述べる。

2段目の葺石は、基底石下端の標高が西端では約117.4m、東端では約117.1mであり、前方部前端にむかって徐々に標高が下がっていることがわかる。この状況は前方部南側においても認められることから、前方部全体が前端にむけて下がっていくように古墳が構築されているといえる。ただし、同じ前方部で比較すると、北側の本トレンチの方が南側に比べて若干標高が高いことから、南北方向においても南側にむけて下がっていくように古墳が構築されていたと想定できる。おそらく、本来あった尾根の傾斜にあわせて築造した結果と考えられる。

また、前方部側から4つめの基底石のところわずかながら基底石のラインが屈曲していることがわかる。加えて、南クビレ部2008調査区と本トレンチで検出した基底石列は墳丘主軸を中心に線対称の関係になっていない。これらのことは墳丘形態を復元するうえで考慮に入れておく必要があるであろう。

基底石に用いられている石材はおおむね長径25～50cmのものである。ほぼ全ての基底石が長軸を横にむけるかたちで置かれており、縦方向に置いているものはこのトレンチでは確認できなかった。南クビレ部2008調査区では、後円部側から前方部側へ葺石を葺いていった可能性を指摘したが、本トレンチではそのような方向性を積極的に論じるような基底石の重なりは認められなかった。おおよそ前方部側の石の上に後円部側の石が重なる形で置かれているようだが、一部その順序が逆になるものもあり、一定の方向性が存在したかは判然としない。

基底石を含めた葺石の高さは、最も残っているところで43.5cm、標高117.6mであり、50°程度の傾きで積まれている。基底石より上部の石材の大きさは10～30cmとばらつきがあり、大きさを揃えようという意思を読み取ることはできない。むしろ、大小の石材を臨機応変に用いて石材同士の密着性を高めていたと考えられる。良好に残っているところでも3段程度であり、葺石の構築に際して

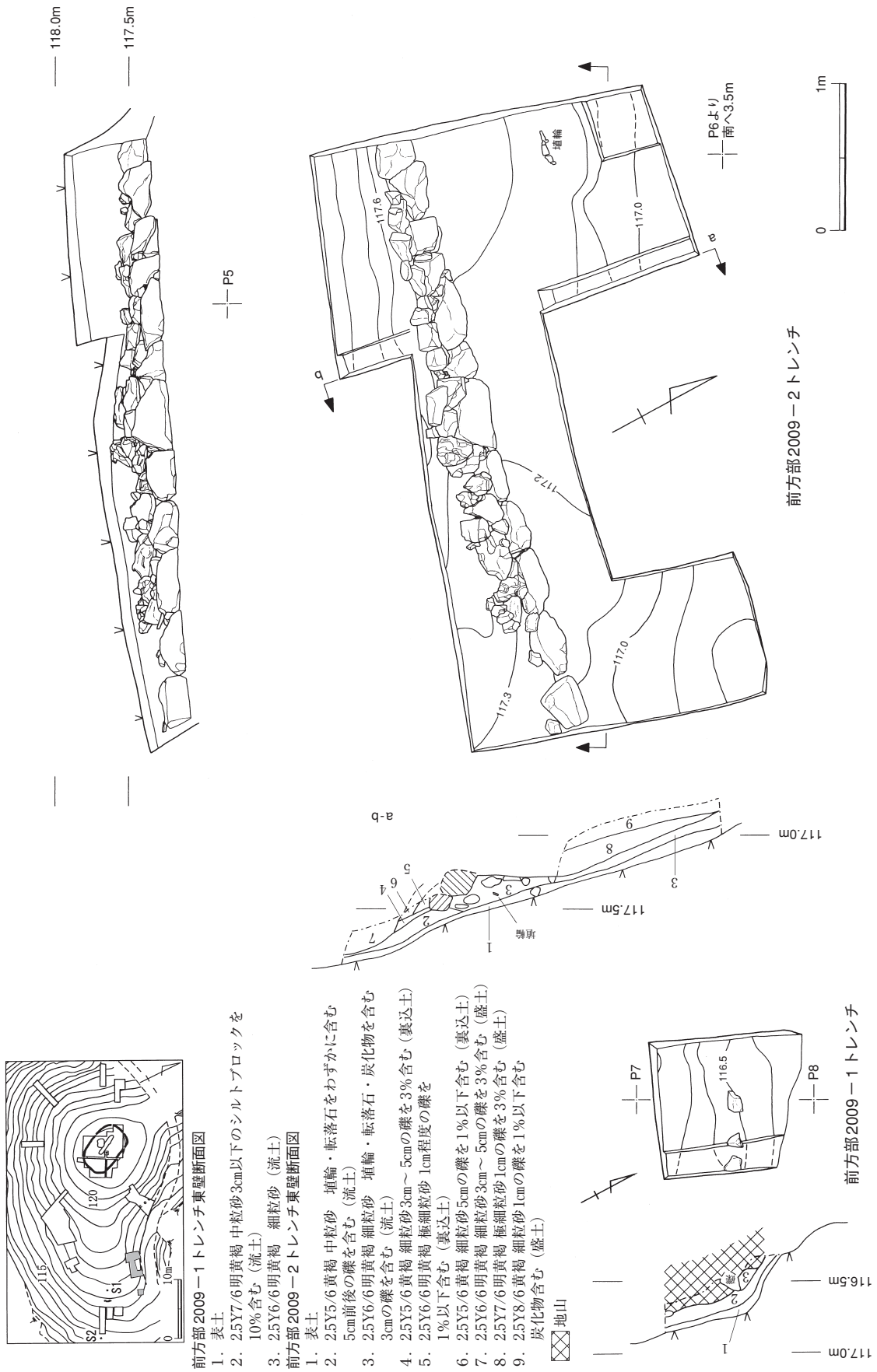
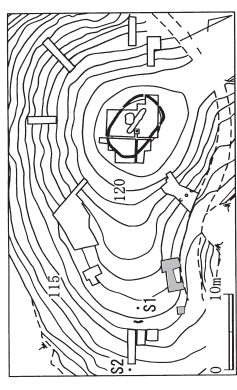


図11 前方部2009-1・2トレンチ平面・立面・土層断面図



前方部2009-1トレンチ東壁断面図

1. 表土
2. 25Y7/6明黄褐 中粒砂 3cm以下のシルトブロックを10%含む (流土)

前方部2009-2トレンチ東壁断面図

1. 表土
2. 25Y5/6黄褐 中粒砂 埴輪・転落石をわずかに含む 5cm前後の礫を含む (流土)
3. 25Y6/6明黄褐 細粒砂 埴輪・転落石・炭化物を含む 3cmの礫を含む (流土)
4. 25Y5/6黄褐 細粒砂 3cm~5cmの礫を3%含む (裏込土)
5. 25Y6/6明黄褐 極細粒砂 1cm程度の礫を1%以下含む (裏込土)
6. 25Y5/6黄褐 細粒砂 5cmの礫を1%以下含む (裏込土)
7. 25Y6/6明黄褐 細粒砂 3cm~5cmの礫を3%含む (盛土)
8. 25Y7/6明黄褐 極細粒砂 1cmの礫を3%含む (盛土)
9. 25Y8/6黄褐 細粒砂 1cmの礫を1%以下含む 炭化物含む (盛土)

⊗ 地山

前方部2009-1トレンチ

前方部2009-2トレンチ

20 前方部の調査

区画を設けておこなっていたかは判然としない。

1 段目のテラス面は攪乱が著しく、残存しているところで幅50cm程度である。2008年度の第2次調査において、2 段目基底石より北側に90cm離れたところから埴輪片がまとまって出土しているが、底部の破片ではないため、埴輪の樹立に関する詳細な情報は不明である。おそらくは南クビレ部2008調査区と同様に円筒埴輪が一定間隔で立て並べられていたと考えられるが、墳丘の削平などのために流出してしまったのであろう。

第2次調査において、墳丘の構築方法にかんする情報を得るために墳丘盛土の一部で断ち割り調査をおこなった。2 段目葺石南側にて断ち割った部分での土層観察によると、葺石の裏側は墳丘盛土との間に若干の裏込土を用いていることが判明した。さらに、1 段目テラス面から墳丘下方にかけておこなった断ち割りでは、2層の盛土を確認することができたが、地山面を検出することはできなかった。そこでトレンチの北側を、地表下80cm、標高115.8mまで部分的に掘り下げたが、そこにおいても比較的均質な遺物の混じらない堆積が続いていた。このような状況は、葺石施工レベルの直下で地山面を確認した南クビレ部2008調査区とは明瞭に異なっている。このことは古墳築造に際して用いられた盛土量の多寡に直結する問題であり、長尾山古墳においても古墳築造労働力を算出する試みをおこなったが(横地2008)、今後墳丘北側の構築状況をより正確に把握した上で再考する必要があるであろう。

前方部2009-1 トレンチは、前方部2009-2 トレンチから東へ約2.0mのところ長さに1.0m、幅1.0mの大きさで設置した。掘削をおこなったところ、古墳に伴うような遺構を検出することはできず、表土下10~20cmほどで地山面を検出した。トレンチ中央を東西に横切る形で若干の礫を確認したが、2 段目基底石列のラインに厳密には合っていないこと、礫の大きさが基底石と考えるには小さすぎること、地山面にめり込むような状態であることなどから、転落石もしくは地山に含まれる礫の可能性が高いと判断した。(金澤雄太)

(3) 前方部2009-3 トレンチ (図12、図版8)

前方部2009-3 トレンチは、南クビレ部2008調査区における調査成果をふまえ、前方部南側の詳細な墳丘形態、外表施設の状況を確認するために設定したトレンチである。南クビレ部2008調査区から東へ4.0mのところには、当初より礫が地表面に露出しており、それが南クビレ部2008調査区で検出した2 段目基底石の延長上にあたる可能性を考慮に入れながら、長さ2.2m、幅1.0mのトレンチを設けて掘削をおこなった。すると、面的に広がる大量の礫群を検出した。それら礫を含む層の中には埴輪片が多く含まれていたため転落石であると判断し、慎重に掘削を進めたところ、転落石の下から比較的大きく並びのよい石材を3石検出した。3石とも広く平らな面を南に向け、南クビレ部2008調査区で確認した2 段目基底石とつながる可能性が高いことから、原位置を保つ2 段目基底石であると判断した。基底石の上にはさらにいくらかの礫群が存在し、これらも比較的並びのよい組み合わせの状態を呈していたため、基底石の上に積まれた原位置を保つ葺石であるとみられる。

その後、基底石ラインをさらに検出するために東側に拡張をおこなった。拡張区においても並びのよい比較的大きな石材を3石検出することができ、先に検出した基底石との連続性から原位置を保つものと判断した。これにより全体で約2.3mにわたる2 段目基底石・葺石およびテラス面を検出する

ことができた。南クビレ部2008調査区では残存を確認できた1段目の葺石やテラス面にかんしては、墳丘の残存が悪く、その痕跡を一部でとらえたのみであるが、このトレンチの成果により、前方部南側の広がりをはほぼ確認することができたといえる。以下にもう少し詳しい所見を述べよう。

2段目の葺石の標高は、基底石下端で示すと検出西端では約117.2m、東端では約117.1mであり、前方部前端にむかって徐々に標高が下がっていることがわかる。この状況は前方部2009-2トレンチと同様である。

基底石に用いられている石材は長径35～45cmのものである。検出した全ての基底石が長軸を横にむける形で置かれており、縦方向に置いているものは前方部2009-2トレンチと同様に確認できなかった。基底石の重なりを観察すると、昨年度の南クビレ部2008調査区の所見と同様に、後円部側から前方部側にむけて設置されていたと考えられる。

基底石を含めた葺石の高さは、最も残っているところでおおよそ45cm、標高117.7mであり、60°程度の傾きで積まれている。基底石より上部の石材の大きさは10～30cmとばらつきがあり、前方部北側と類似した状況である。良好なところでは石積みが6段程度残っているが、全体としては残りが悪く、葺石の構築技法といった情報はあまり得ることができなかった。

2段目葺石の北側では2つの異なる土層を検出した。まず土質から地山と考えられる層が確認され、その南側の7層は葺石構築に伴う裏込土の可能性が高いと判断した。裏込土を用いるこうしたあり方

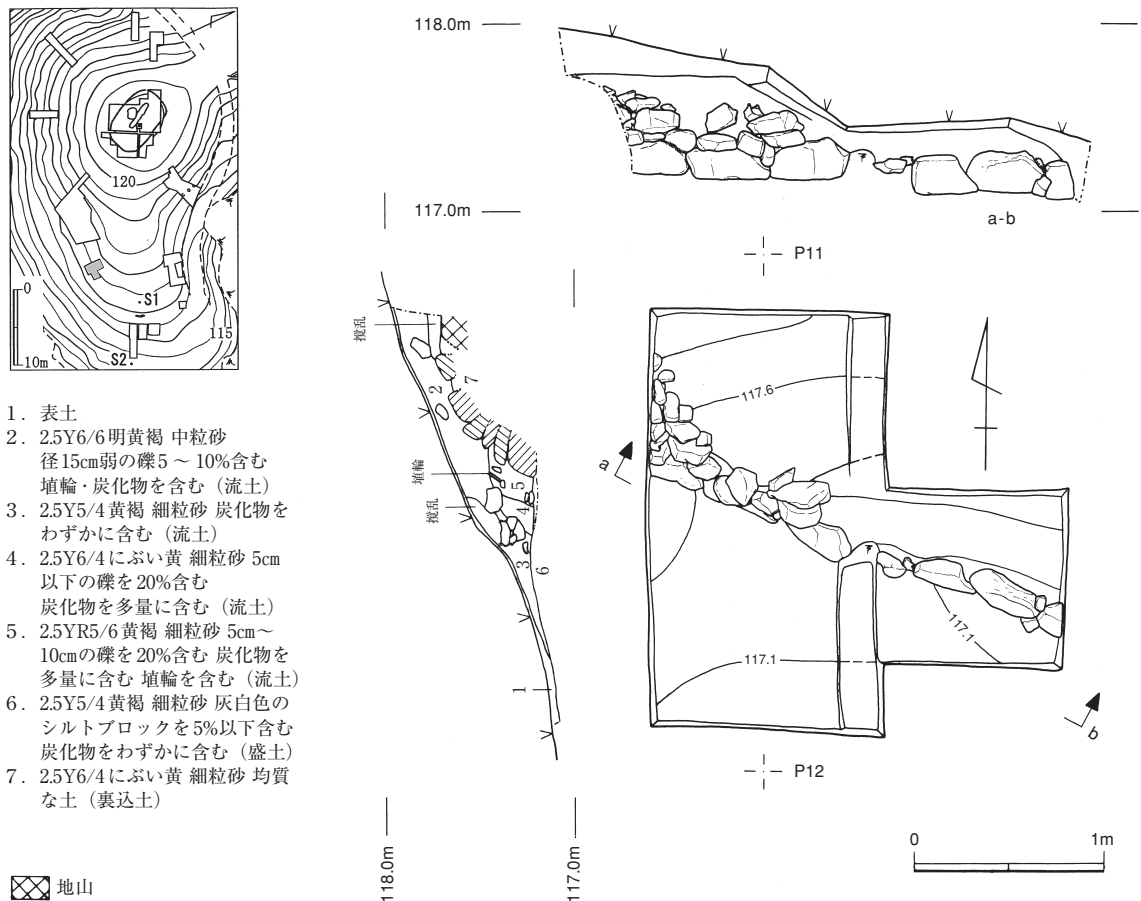


図12 前方部2009-3トレンチ平面・立面・土層断面図

22 墳頂部の調査

は前方部2009-2トレンチで確認した状況と類似しており、長尾山古墳の築造においては比較的多用された方法と考えられる。

1段目のテラス面は、基底石からおよそ40cmのところまでは比較的平坦であるが、その後、本来1段目の葺石があったと考えられる場所へとなだらかに傾斜していくことから、墳丘の流出があったと考えられ、当時のテラス面の幅を確定することはできなかった。その際に、埴輪列もともに流出してしまったのであろう。

前方部南側の墳丘構築方法を探るために、トレンチ東壁に沿って断ち割り調査をおこなったところ、石列の直下から地山面を検出した。このことから、前方部南側ではほぼ地山削り出しで墳丘が形作られ、盛土は限定的であることがわかった。(金澤)

6 墳頂部の調査 (図版9・10)

長尾山古墳の墳頂部には、由来不明のコンクリート杭(R1)とその枠が埋設されており、埋葬施設が破壊されている恐れがあった。そこで大阪大学考古学研究室は埋葬施設の残存状況を確認することを目的として2008年と2009年に発掘調査を行った。2008年に実施した調査を3次調査、2009年の調査を5次調査と呼び分け、これまでの調査内容とその成果について述べていきたい。

3次調査ではまず掘削に先立ち、電気探査、地中レーダー探査を実施した。2種の探査結果により、墳丘主軸に斜交する南北方向に異なる反応を得ることができ、これが埋葬施設を反映している可能性が考えられた。そこで探査で得られた情報をふまえ、長さ4m、幅3mの調査区を設定し、幅20cmの十字アゼを残しつつ、必要に応じて拡張区を設けながら掘削を進めた。

表土を除去すると、調査区の北西側中央に拳大の小礫が南北方向に集中しているのが確認できた。探査結果と符合するため、埋葬施設との関連が想定できたが北半には大振りのツツジがあり、範囲を確定することができなかった。また、出土した遺物が埴輪小片のみであったために、小礫群の形成時期を確定するには至らなかった。小礫群以外には、土質の違いから墓壙や盗掘坑の可能性のある遺構を検出した。しかし、3次調査では樹木保護のため、どの遺構も平面的に全形を確認することができず、また掘削深度も限られたものであったため、遺構の性格を確定することはできなかった。なお、上述したコンクリート杭は、小礫群の分布範囲からは外れているものの、慎重な対応が必要である。

5次調査では樹木を丁寧に移植し、昨年度調査の課題として残された埋葬施設の現状確認、墓壙範囲の確認を目指して、長さ8m、幅5.2mの調査区を設定した。その結果、3次調査で検出された小礫群は、礫の密集度が高い範囲でとらえると長さ約3.5m、幅0.7～0.8mとなり(図版9-2)、長径5～8cm程度の小礫が3、4石程度の重なりで厚く堆積している中に多くの土師器小片が検出された(図版10-5)。さらに小礫を多数含む落ち込み埋土を除去すると、しまりの弱い明黄褐色土が認められた。この土質の広がりにより、墳頂調査区を標高120.8mまで掘り下げたところ、明黄褐色土層は長さ3.5m、幅0.7mの範囲に認められた。したがって、小礫を含む落ち込み土は木棺などの腐朽によって生じた陥没坑の埋土であると考えられる。

陥没坑の西側中央には、大小の礫や15～20cm大の粘質土のブロックを含む汚れた明黄褐色土が

堆積している。現状で遺物は出土しておらず、拳大の粘質土ブロックがみられるのみだが、一部赤色顔料が混じったような土もみられる。また、陥没坑同様深く落ち込んでいくことが断面の観察によって確かめられるために、3次調査で想定した盗掘坑の可能性が引き続き考えられる。規模は長さ1.6m、最大幅1.4mをはかり、楕円形を呈する。

また、調査区の拡張を行った結果、墓壙の範囲がおよそ長さ7.8m、幅5.2mの隅丸方形を呈することがわかってきた(図版9-1)。一部墓壙ラインの内側に接してサブトレンチを設け、墓壙埋土を深さ50cmほど掘り下げたところ、標高120.4mの地点に堅くしまった礫混じりの浅黄色土を確認できた(図版10-3)。これは地山に近い土質である。そのため、墓壙の底あるいは二段墓壙の上段の底面にあたる可能性が考えられる。

以上がこれまでにを行った墳頂調査区の成果である。ただし、現在検出している墓壙の範囲は、部分的に埋土が異なるなど、慎重に精査しなければならない箇所も残る。また、埋葬施設の残存状況にかんしては、なお十分な手がかりが得られていない。

なお、樹木保護に配慮して墓壙ラインの一部が未検出となっている部分がある。今後、樹木を移植するなどして、正確な情報の把握を行う必要が残されている。(中久保)

7 墳丘の復元 (図13)

これまでの調査によって、後円部1ヶ所(後円部2009調査区)、クビレ部1ヶ所(南クビレ部2008調査区)、前方部3ヶ所(前方部2008-1・2009-2・2009-3トレンチ)において、基底石を含む葺石やまとまった転落石群を検出することができた。また、後円部2007-4トレンチでは原位置を保つものではないものの、葺石に起源をもつと推定できる礫群が認められた。

墳丘復元の前提となる墳丘主軸については、各トレンチの所見を総合的に判断して次のように考えている。まず、前方部前面葺石基底ラインに直交する方向を基準として、R1-S1軸より反時計回りに4°ふったラインを墳丘主軸として設定する。座標北に対して西に68°ふる。

このように墳丘主軸を設定すると南クビレ部2008調査区で検出された前方部基底石の走行方向は4°墳丘内側にむき、逆に前方部2009-2トレンチは3°墳丘外側にひらくことになる。また、前方部2009-2トレンチと反対の前方部南側に設けられた前方部2009-3トレンチで検出された2段目基底石方向も主軸に対し、約10°墳丘外側にひらく。したがって、当古墳の前方部基底ラインは、後円部からいったん鈍角に屈曲して墳丘内側に延びた後、徐々に墳丘外側にひらくようにラインが走行していく形状になる。次にクビレ部から後円部の形状をみていこう。

まず、2008年に実施した2次調査では不明であった後円部東側の2段目基底石列が明瞭になり、南クビレ部2008調査区ではテラス面の幅が1.0mであるのに対して、後円部2009調査区では1.7mと後者のほうが広いことが判明した。そこで第2・3次の概報段階(福永編2009:p.14)で用いた後円部中心を西へ0.4m移動させ、後円部2段目基底ラインを復元した。さらに後円部1段目基底ラインは、この点から北へ0.4m移動させた点を中心とした。このように操作した結果、後円部径は1段目基底が25.2m、2段目基底が22.0mとなり、墳長は約40mに復元できた。

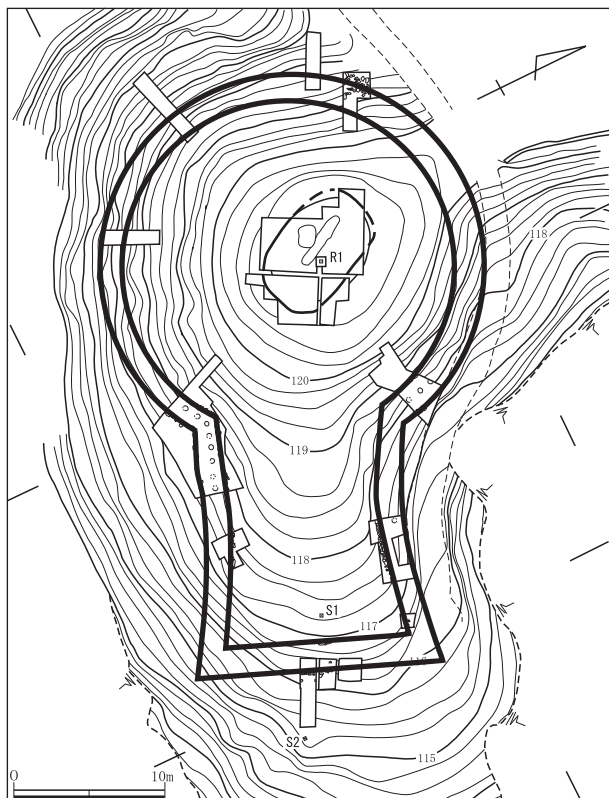


図13 墳丘形態の復元

最後に各地点で検出された葺石基底石の高さに基づき、側面形態についても確認しておきたい。まず、後円部2007-4トレンチでは標高118.3～118.7m付近より1段目の葺石起源とみられる礫群が、組み合わせられた状況で検出されている。後円部2009調査区では標高117.4m付近で1段目基底石が、標高118.0m付近で2段目基底石が認められた。さらに南クビレ部2008調査区では後円部側で標高117.2m、前方部側で標高117.0mに1段目基底石が検出されている。前方部前面では標高116.0～116.2mで1段目基底石が認められる。以上の成果をふまえるならば、墳裾の高さとしては後円部と前方部前面で最大2m近い比高差が形成されていたとみられる。なお、1段目葺石の基底部付近では人頭大の扁平な角礫1～2石を直立気味に据え付けることにより、高さ0.3m程度の急角度の斜面

を形成しているのが特徴的である。2段目斜面は南クビレ部2008調査区、前方部2009-2・3トレンチ、そして後円部2009調査区で検出されている。いずれの位置でも、基底石が直立気味に据えられ、斜面全体としてもその傾斜角は45°以上をはかる急角度であった。

以上の検討の結果、長尾山古墳は前方部を東南東にむけた墳長約40mの前方後円墳に復元できた。後円部径は1段目基底で約25m、2段目基底では約22mをはかる。前方部長約14mとなり、前方部長は後円部直径の3/5となる。墳丘主軸の方向はN68°Wで前方部を東南東にむける。ただし、今回の調査では後円部3段目の段築の有無を確認できておらず、この点が今後の課題として残る。(寺前)

第3章 出土遺物

1 埴輪 (図14～17、図版11～16)

当古墳からは2007～2009年度の発掘調査によって、総数8500点あまりの埴輪片が出土した。加えて、南クビレ部2008調査区、後円部2009調査区では、築造当時の配列を保った円筒埴輪底部を計11本確認することができた。これにより、不確定であった長尾山古墳の築造年代を推定することが可能になっただけでなく、円筒埴輪の樹立方法や樹立間隔といった各地の古墳と比較可能な情報が得られたことは、長尾山古墳を総合的に理解する上で貴重な成果である。

なお、10・13・18・22～25の破片は残存率が10%以下であり、復原した径は確度の低いものである。

(1) 口縁部 (図14-1～15)

1～9は朝顔形円筒埴輪の二重口縁である。1は二次口縁の破片で、復元口縁部径28.8cm、残存高4.5cmをはかる。一次口縁との接合部は外面に剥離痕が認められるものの若干の突出があるのみで、内外面ともに直線的に端部へ至り、まるくおさめる。内外面の調整は弱い凹凸の伴うヨコナデである。

2は二次口縁の破片で、復元口縁部径29.2cm、残存高4.4cmをはかる。一次口縁との接合部はゆるい稜をもちながら屈曲し、端部を外側につまみだす。内外面ともにヨコナデが施されている。

3は一次口縁から二次口縁の破片で、復元口縁部径30.6cm、残存高5.6cmをはかる。一次口縁との接合部は、外面が若干段になっているものの、内面に明瞭な稜をなすことなく直線的にのび、端部をまるくおさめる。外面調整は一次口縁にタテハケを施したのちそれを切る形でヨコナデをおこなっている。内面調整は摩耗が著しく確認できない。

4は一次口縁から二次口縁の破片で、復元口縁部径35.2cm、残存高10.2cmをはかる比較的大きな個体である。一次口縁との接合部には内外面ともに明瞭な稜をもち、端部はまるくおさめる。外面調整は一次口縁にタテハケが施され、二次口縁にはタテハケの後にヨコナデをおこなっている。内面調整は一次口縁の下部にヨコハケが認められるが、そこより上部は摩耗が著しく詳細は不明である。

5～9は二重口縁であるが、口縁部径の復元できない小破片である。5は端部をまるくおさめる二次口縁の破片で、残存高4.9cmをはかる。一次口縁と二次口縁の接合部にナナメ方向の刻み目が施されており、接着を強固にするための工夫が認められる。内外面ともにヨコナデで調整している。

6は端部を外側につまみだしている二次口縁の破片で、残存高4.0cmをはかる。内外面調整は微小な凹凸のあるヨコナデである。外面全体および内面の一部に赤彩が認められる。

7は端部をまるくおさめる二次口縁の破片で、器壁の厚さが1.6cmと他のものに比べて厚く、残存高4.8cmをはかる。この個体にも5と同じように、一次口縁と二次口縁の接合部にナナメ方向の刻み目が施されている。外面調整は微小な凹凸のあるヨコナデで、内面は磨耗のため調整がわからない。

8は一次口縁から二次口縁にかけての破片で、一次口縁との接合部は外面にゆるやかな稜をもち、内面は稜をもたずなだらかに端部に至る。残存高は8.4cmをはかり、端部を内側につまみ出す点の特

微的な個体である。外面調整はヨコナデで、内面調整も端部付近はヨコナデであるが、その下部には横方向のケズリをおこなっている。外面に黒斑が認められる。

9は端部を外側につまみだす二次口縁の破片で、残存高5.65cmをはかる。一次口縁との接合部は外面にゆるやかな稜をもち、内面は稜をもたずなだらかに端部に至る。外面調整は微小な凹凸のあるヨコナデで、内面は磨耗のため調整がわからない。外面全体に赤彩が残っている。

10～15は普通円筒埴輪の口縁である。10は最上段突帯から強く外反していく形態のもので、内面に稜をもたない。端部は残存していないが、おおよそ口縁部径32cmに復元でき、残存高は7.1cmをはかる。口縁部高は判然としないが、6cmほどに復元できようか。調整は内外面ともに磨耗が激しく不明であるが、内面には調整の際の工具があたったような痕跡が認められる。突帯は器面からの高さ0.6cmで台形状を呈する。

11は最上段突帯から強く外反していく形態で、内面に明瞭な稜がつくりだされている。端部は残存していないが、おおよそ口縁部径33.2cmに復元でき、残存高は7.4cmをはかる。口縁部高は6cm程度と考えられる。外面調整は不明瞭ながらタテハケの後にヨコナデが施され、内面調整は不明である。突帯は器面からの高さ0.6cmで台形状を呈し、外面には赤彩や黒斑が認められる。

12は突帯が全て剥離してしまっているが、10・11と同様に最上段突帯から強く外反していく形態で、内面にはゆるやかな稜が残る。端部の推定が困難であるため口縁部径は不明であるが、残存高9.6cmをはかる。突帯の剥離面と思われる部分には、ハケと異なる細かな刺突があり、突帯設定技法の可能性も考えられる。外面調整は1cmあたり7条ほどのナナメハケの後に、ヨコナデを行い、内面調整は1cmあたり8条程度のナナメハケ・ヨコハケの後に、ヨコナデをおこなっている。外面全体に赤彩が残る。

13は同じく最上段の突帯から外反する口縁部であるが、内面は稜のないなだらかなものである。小破片であるため径を復元することはできず、任意の径で図化をおこなった。残存高は4.7cmをはかる。外面調整にはヨコナデが認められ、内面は磨耗のため調整がわからない。突帯は器面からの高さ1.3cmで、外面に赤彩が残る。

14は最上段突帯から強く外反していく形態であるが、内面に稜はなく、端部まで残存しない。残存高5.7cmをはかり、内外面ともにヨコナデで調整されている。

15は朝顔形円筒埴輪の二重口縁の可能性も考えられたが、傾きなどから、器台状を呈する普通円筒埴輪の口縁部付近として図化した。残存高8.4cmの小破片であり、外面はタテハケ、内面は全体をヨコナデで調整している。

(2) 頸部 (図15 - 16 ~ 19)

朝顔形円筒埴輪の頸部片は多く出土しているが、その中で比較的残りのよいものを4点図化した。16は頸部から一次口縁にかけての屈曲が比較的強い破片で、残存部位における復元最大径24.8cm、復元最少径15.0cm、残存高6.0cmをはかる。外面調整は頸部上半にハケを施した後、一次口縁部にヨコナデをおこなっている。内面は磨耗が激しく調整を確認することができない。

17は現在確認できている最も残りのよい破片で、復元頸基部径19.0cm、残存高13.6cmをはかる。

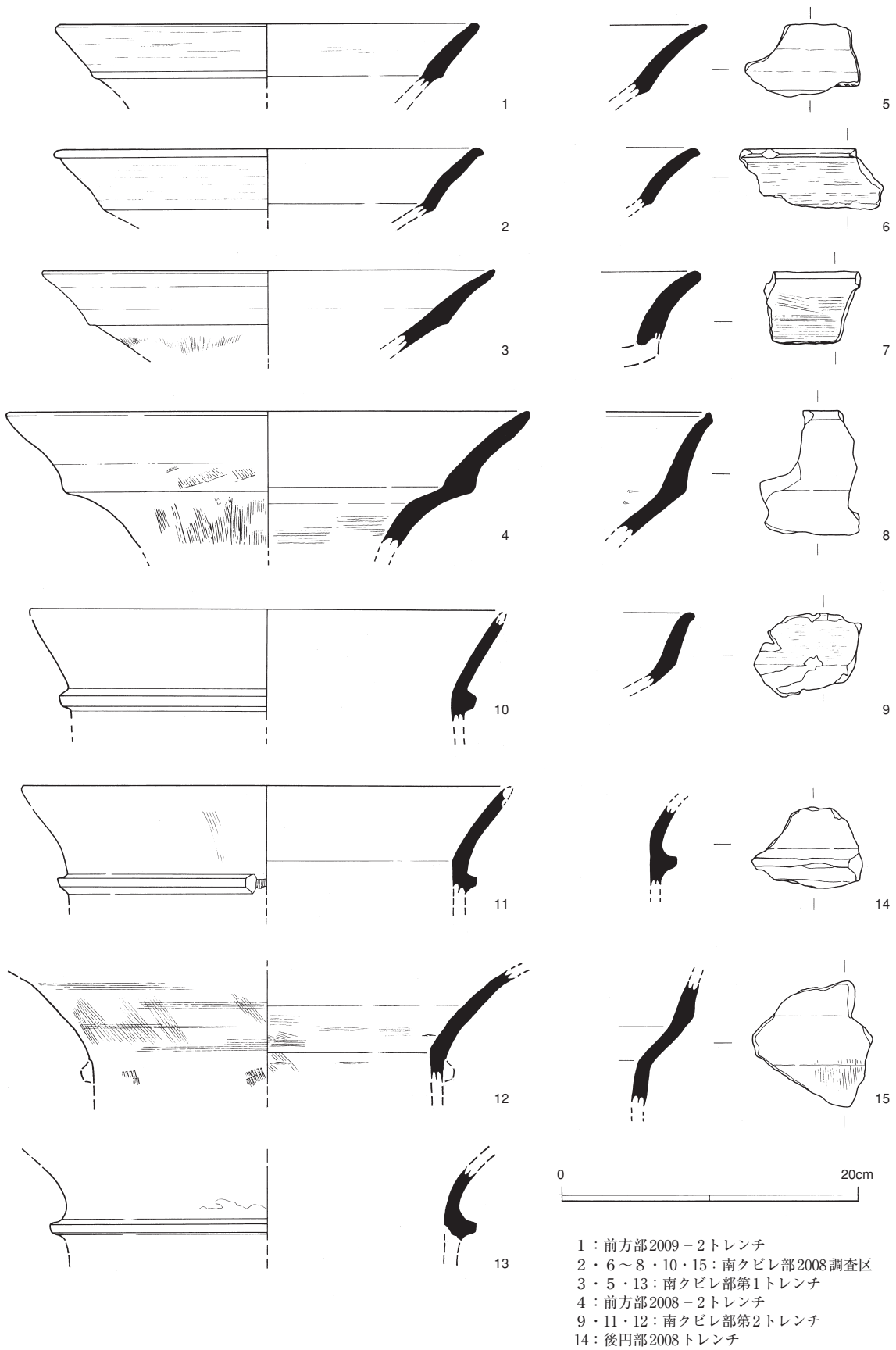


図14 長尾山古墳出土埴輪実測図1

他の個体に比べてサイズがひとときわ大きいことが特徴である。頸部突帯はつけられていない。基部から肩部にかかるところの器壁が薄く、内面に剥離痕のようなものが確認できることから、図のような復元を行っている。基部からゆるやかに斜め上方へのびた後、角度を変えてさらに外方へ屈曲する形状をもつ。外面調整は頸部全面にタテハケが密に施され、一次口縁へと屈曲するあたりにはさらにヨコナデをおこなっている。ハケの条痕密度は1 cmあたり9条である。内面調整は摩耗が激しいがヨコハケが確認され、1 cmあたり7条と外面に比べて密度の低いハケ工具が用いられている。外面に赤彩、内外面に黒斑が認められる。

18は頸基部の復元径14.4cm、残存高9.7cmをはかる個体で、頸部突帯はついていない。17に比べて基部から直線的に外方へのびていく形態をもち、肩部との境にゆるやかながら稜が認められる。外面調整はタテハケで、内面は摩耗により調整は不明である。

19は18と同様の形態のものだが、頸基部の復元径が16.8cmとやや大きく、残存高は6.9cmをはかる。頸部突帯はついていない。外面調整はタテハケが認められ、内面は摩耗のため調整は不明である。外面にわずかながら赤彩が残っている。

(3) 胴部 (図15 - 20 ~ 29)

20は朝顔形円筒埴輪の肩部に続く突帯の破片で、上端部が強く外方に突出する受口状の突帯である。肩部はやや膨らみをもつが、それほど顕著なものではない。復元突帯径は32.8cm、器壁からの高さ2.1cm、残存高は9.0cmをはかる。外面調整は突帯より下の胴部でタテハケ、上の肩部でナナメハケが確認できる。突帯直下には突帯にかかるハケが確認できることから、ハケを用いた若干の二次調整が行われていることがわかる。内面調整はケズリが確認でき、砂粒の移動方向によると下から上にむかっておこなっていたようである。外面にわずかながら赤彩が残っている。

21は受口状突帯の破片で、上端部を外方に突出させるものである。復元突帯径30.6cm、器壁からの高さ1.6cm、残存高4.2cmをはかる。内外面の調整は摩耗のため判然としない。

22は受口状突帯の破片で、上端部を外方に突出させる形態は20・21と共通する。器壁からの高さ2.1cm、残存高2.0cmをはかるが、小破片であるため図示した径は不確実なものである。外面調整は不明であるが、内面調整には下から上へのケズリが施されている。突帯下方の器壁が非常に薄く、剥離したものかもしれない。

23は断面台形状の突帯片で、復元突帯径31.2cm、器壁からの高さ1.3cm、残存高2.3cmをはかり、次に述べる24に比べて重厚な印象をもつものである。内外面ともに摩耗が著しく調整は判然としない。

24は、23と同じく断面台形状の突帯片で、復元突帯径26.4cm、器壁からの高さ0.7cm、残存高5.8cmをはかる。外面調整は判然としないが、内面は下から上へのケズリが認められる。外面に黒斑や赤彩の付着が確認できる。

25は20と同じく朝顔形円筒埴輪の肩部に続く突帯の破片で、端部を若干上方に引き出す台形状の突帯である。復元突帯径は28.2cm、器壁からの高さ1.4cm、残存高は6.8cmをはかる。外面調整にはタテハケがみられ、それを切る形で突帯に伴うヨコナデが施されている。内面調整は摩耗のため判然としないが、斜め上方へ向かう砂粒の移動が確認できることから、ケズリをおこなっていたことがわかる。

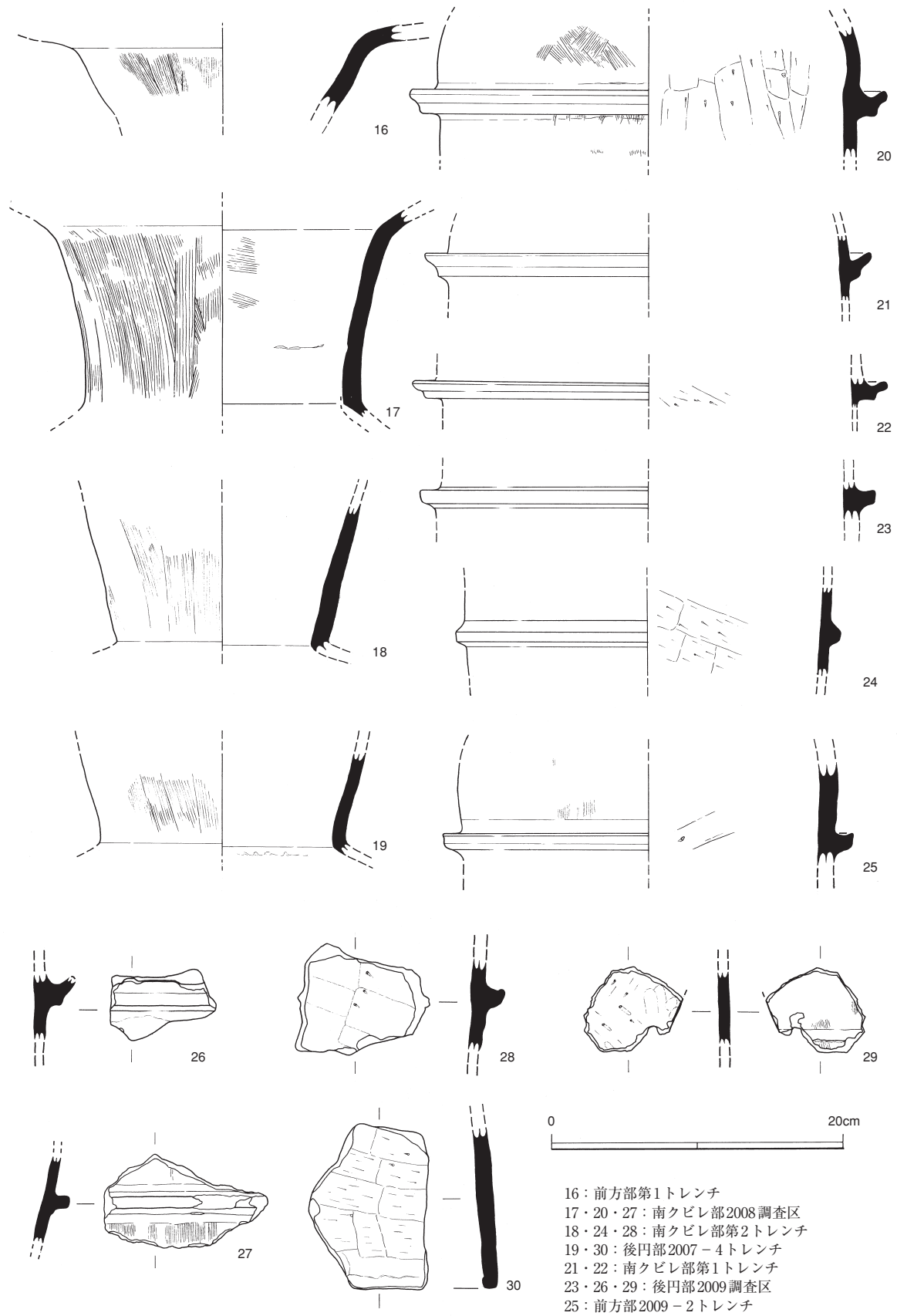


図15 長尾山古墳出土埴輪実測図2

26は受口状突帯の破片で、20・21・22と同じく上端部を強く外方に突出させている。器壁からの高さ2.0cm、残存高4.5cmをはかる。外面調整は突帯貼り付けに伴うヨコナデ以外は確認できず、内面調整はナデやユビオサエが認められる。外面の広い範囲に赤彩が付着している。

27は断面方形の突帯片で、小破片のため径は復元できなかったが、器壁からの高さ1.0cm、残存高5.8cmをはかる。外面調整は条痕密度が1cmあたり9～10条のタテハケが施され、その上から突帯を貼り付けてヨコナデを行っている。内面調整は摩耗のためよくわからない。外面の一部に赤彩が残っている。

28は外面の磨耗が著しい突帯の破片である。上端部が若干つまみあげられているようにもみえるが、ナデの調整によって生じたとも考えられ受口状突帯であるかは定かでない。器壁からの高さ1.3cm、残存高6.2cmをはかる。外面調整は判然としないが、内面には斜め上方へ向かう砂粒の移動や凹凸による単位が確認でき、ケズリ調整をおこなっていたことが明瞭にわかる個体である。

29は胴部の破片で、スカシ孔の一部が認められる。今までの調査でスカシ孔が残る埴輪を確認できなかったため、大きな課題となっていたが、2009年度の調査ではじめて確認に至った。残存高は5.7cmをはかり、スカシ孔の残存部分は2.4cm程度と極めて少ないが、突帯の剥離した痕跡や突帯に伴う横方向のナデが確認できることから、突帯に近接する三角形のスカシ孔であることがわかる。外面調整はタテハケで、内面調整は単位は不明瞭ながら下から上へのケズリが行われ、スカシ孔付近にはナデやユビオサエの痕跡も確認できる。

(4) 底部 (図15～17-30～36)

30は流土から出土した底部の破片で、小破片であるため底部径は復元できないが、厚さ1.2cm、残存高11.4cmをはかる。やや内側に傾く形態で、底端部には内側に粘土を巻き込んだような痕跡が認められる。外面調整は摩耗のためよくわからないが、内面は横方向のケズリが施されている。

31は流土から出土した底部片で、ほぼ直立する形態をもち、復元底部径32.4cm、厚さ1.8cm、残存高12.3cmをはかる。外面調整は摩耗のため全くわからないが、内面調整は基部にタテハケやナデを施し、その上部では下から上に向かうケズリが行われている。

32は流土から出土した底部片で、形態は31と同じく直立する形態である。復元底部径35.4cm、厚さ1.8cm、残存高11.0cmをはかる。外面調整は1cmあたり8条のタテハケと、1cmあたり8～9条のヨコハケが確認できる。内面調整は摩耗のため判然としないが、横方向に砂粒が動いた痕跡が認められるためケズリが行われていたことがわかる。

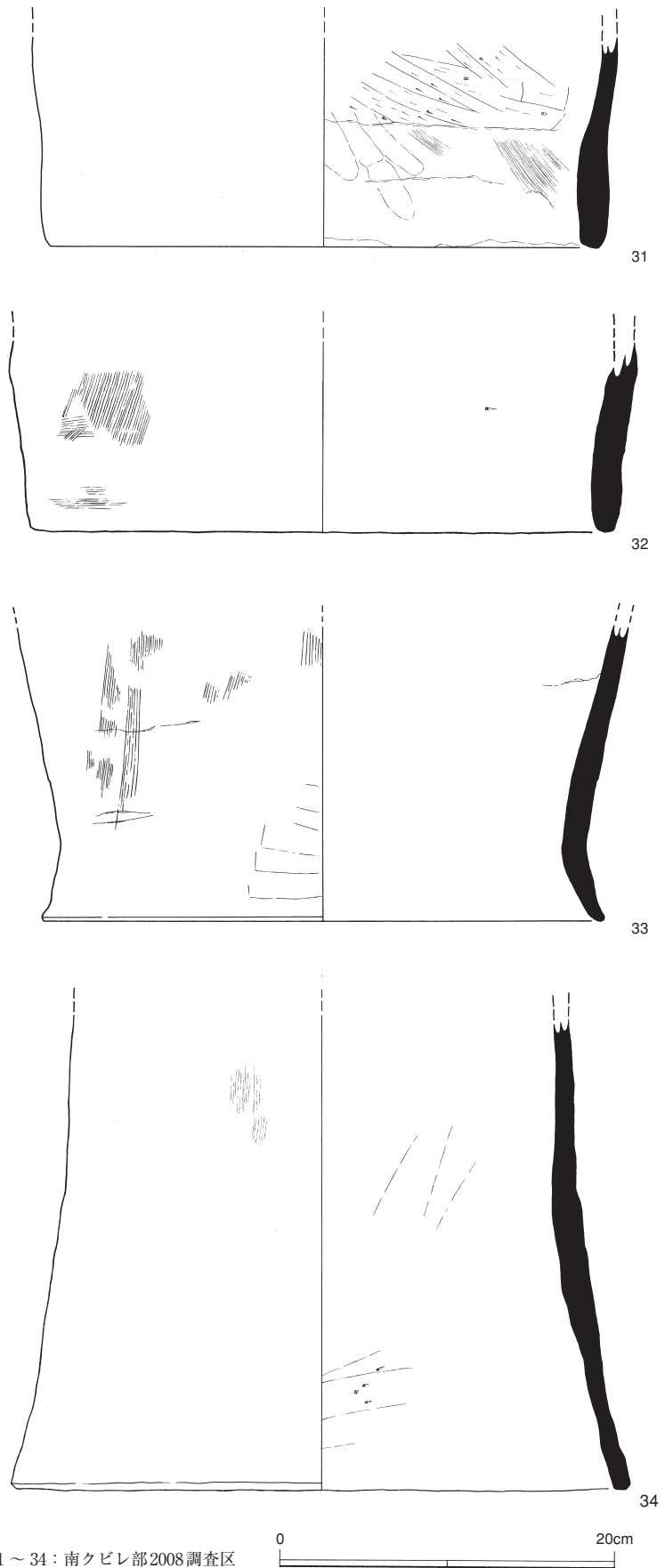
33～36は南クビレ部2008調査区で検出した樹立埴輪の一部である。33は西側から2つめのもので、接地面から若干内傾した後に、外上方へのびていく特異な形態である。底部径33.4cm、厚さ1.5cm、残存高17.6cmをはかる。外面調整はやや右方向に傾くタテハケが施され、その下部には板状工具でナデを施したような水平ないし右下がりの圧痕が確認でき、あるいはタテハケに伴うものかもしれない。内面調整は摩耗のため判然としない。外面には接地面付近にまで赤彩が施されており、長尾山古墳の埴輪樹立方法に関係する可能性もある。

34は西側から5つめのもので、ゆるやかな裾広がり状を呈する形態である。底部径36.4cm、厚さ

1.0～1.7cm、残存高27.0cmをはかり、底部片の中で最も高さが残っている資料であるが、上部において突帯に伴うナデのような痕跡が認められないことから、底部高はさらに高くなると考えられる。外面調整は摩耗のため判然としないが、タテハケの痕跡が若干ながら確認できる。内面調整も残りが悪いが、上から下へむかう砂粒の移動が確認できることから、底部の成形の際に倒立させてからケズリをおこなっていたことがわかる。

35は西側から7つめのもので、31・32のように直立する形態を呈し、底部径34.5cm、厚さ0.8～1.2cm、残存高20.2cmをはかる。外面調整は直立もしくはやや右方向に傾くタテハケで、33と同様下半に右下がりの板状圧痕が確認できる。内面調整は上半が摩耗のためわからないが、下半にはケズリが施され、横方向だけでなく上から下への砂粒の動きが観察できる。それらの先後関係はわからないが、34と同様成形の際に倒立させてケズリをおこなっていた可能性が高い。外面には赤彩が残存している。

36は西側から8つめのもので、34に比べて裾広がりの方が強い形態であり、底部径39.4cm、厚さ1.1cm、残存高14.8cmをはかる。内外面ともに摩耗が著しく、調整



31～34：南クビレ部2008調査区

図16 長尾山古墳出土埴輪実測図3

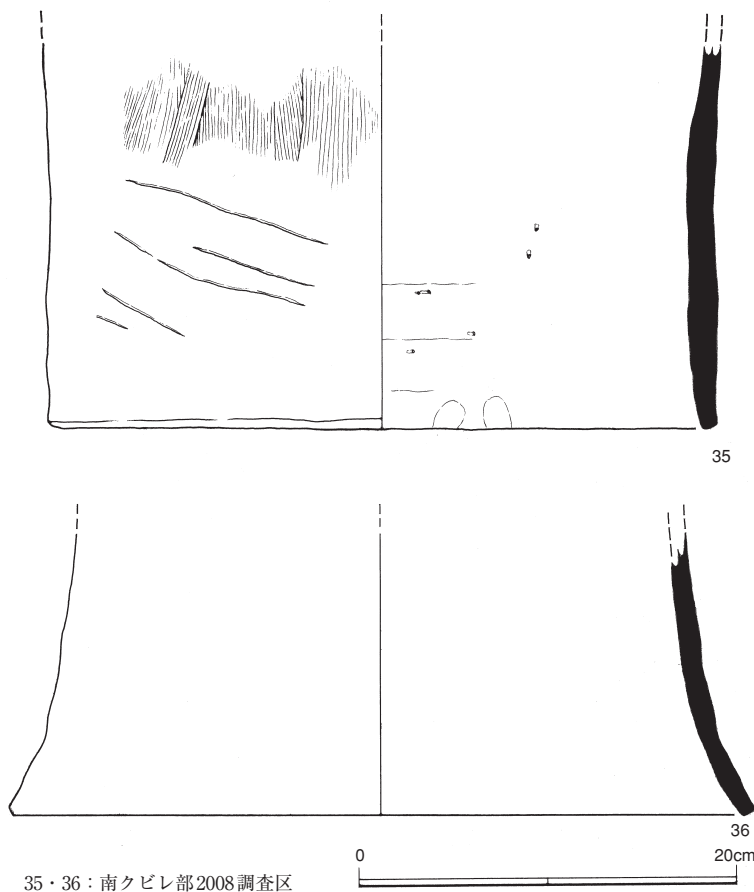


図17 長尾山古墳出土埴輪実測図4

は判然としないが、底部形態などから考えて、おそらく内面はケズリが行われている可能性が高い。

(5) 埴輪の特徴と編年的位置

以上、各個体の特徴をやや詳細に述べてきた。部位ごとにかなりのバリエーションが存在するため、それらをどのように対応させるかは全形の復元とともに考えていく必要があるが、いま一度特徴をまとめ、今後の課題や想定される埴輪の編年的位置について述べておきたい。

口縁部は二重口縁のものと最上段突帯から強く外反する2種類のものがあり、それぞれ朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪に対応する。二重口縁の破片は、総じて二次口縁の長さが短く、定

型化した朝顔形円筒埴輪に多い接合面の突帯も確認できないことから、壺形土器の形状を強く残す定型化以前のものである可能性が指摘できる。普通円筒埴輪と考えられる口縁も比較的外反の程度が強く、型式学的には古い要素として評価することができるであろう。

これら2種類の口縁部にかんして特筆すべきことは、その量比である。個体数ではあるが、口縁部全体の出土数の9割以上を朝顔形円筒埴輪の二重口縁が占め、普通円筒埴輪の外反口縁は1割にも満たない。今後の調査によってこの比率が逆転する可能性は低いと考えられ、ここまで明瞭な差異には一定の解釈が必要とされる。長尾山古墳の朝顔形円筒埴輪の口径は、ごく一部のものを除いて普通円筒埴輪のそれと大きくは変わらないため、量比に影響はない。したがって、墳丘に樹立されていた個体数自体に大きな差があったとみられる。つまり、一般的な埴輪配列では、普通円筒埴輪数本おきに朝顔形円筒埴輪が置かれるが、長尾山古墳ではその比率が逆転し、むしろ朝顔形円筒埴輪が大多数を占める中に普通円筒埴輪が少数立て並べられていたと考えられるのである。

朝顔形円筒埴輪の頸部は法量にばらつきがあるものの、形態的な特徴は個体間で類似しており、直立する形のものも現状で認められない。製作技法としては肩部から連続的に粘土紐を積み上げていく方法が多い印象を受けるが、乾燥工程の認識など考慮すべき問題は多く、さらなる観察・図化作業を通して今後明らかにしていく必要がある。

突帯の特徴としては、やはり受口状突帯の存在が特筆される。こういった突帯の類例としては奈良県天理市東殿塚古墳（松本・青木編2000）、御所市鴨都波古墳群出土埴輪棺（藤田・木許編2001）、大阪府柏原市玉手山9号墳（安村編2001）、愛媛県今治市相の谷1号墳（富田編2007）などがあるが、形態や作り方に個体差が著しく、直接的な比較は難しい。これらの古墳の年代や、器台と壺の結合状態を保った形態であることをふまえると、年代的には古い属性と考えることができるであろう。長尾山古墳への埴輪導入過程を考える上でも、この受口状突帯は重要な要素になってくると思われるが、ここでは踏み込んだ議論は行わず類例をあげるに留め、今後の課題としておきたい。

スカシ孔にかんしては、2009年度の調査においてはじめて確認することができた。形状は三角形を呈し、突帯に近接することからおそらく千鳥状に配置されていたと思われる。しかし、確認できたものは29のみであり、全体としてスカシ孔を穿孔していた埴輪がごく少量であったことはほぼ間違いないであろう。この点も当古墳を特徴づける大きな要素である。

底部の特徴としては、その形態に様々なバリエーションが認められることであろう。一般的な直立するものだけでなく、裾広がりを呈するものや33のようなものが存在することは、長尾山古墳における円筒埴輪の生産体制を考える上で重要な問題である。また、製作技法の点で注意しなければいけないことは、いくつかの個体で倒立させて成形した可能性を指摘できる点である。このことは底部形態だけでなく、埴輪の樹立方法や赤彩の範囲、さらには製作技術系譜などにもかかわってくる可能性があり、今後慎重に検討していかなければならない。

このような情報に加えて、確実な鱗付円筒埴輪や形象埴輪の出土が確認されていないこともあわせて考えると、現時点で当古墳の埴輪には古墳時代前期前半の編年的位置を与えることができる。破片資料がその多くではあるが、非常にまとまって出土した当古墳の埴輪は、猪名川流域における埴輪の展開だけでなく、ひろく古墳時代前期の埴輪生産やその波及の過程を考えるうえで貴重な資料といえる。

（金澤）

2 土師器（図18・19）

埴輪以外に土師器が約130片出土した。指先よりも小さい破片が多く、全形がわかる資料はない。墳頂2009調査区の小礫群中から出土したものが114点と大半を占める。そのほかの調査区では細片のために埴輪と区別をつけることが難しいが、南クビレ部2007第1トレンチから15片、南クビレ部2007第2トレンチから口縁部片が1点出土した。ここでは残存状況が比較的良好で、器形を推し量ることが可能な個体を取り上げ、長尾山古墳出土土師器の特徴を述べることにしたい。

墳頂2009調査区から出土した土師器は、復元径や器壁の薄さなどから小型の器種と考えられる。小型壺、甕ないし鉢、器台が確認できる。内面にユビオサエの痕跡をもつ破片が多い。

37は比較的良好な口縁部片である。口縁部の立ち上がりから、小型の壺であると推定できる。器表面の磨耗は著しいが、ナデによる擦痕がみられ、一部には赤色顔料が付着している。

38・39は小型の壺ないし甕の頸部片である。鉢の可能性も考えられる。接合作業を丹念におこなったものの、口縁部や胴部の手がかりを得ることは出来なかった。器厚は0.5cmである。38は内面の

屈曲が1cm程度の面を有し、ゆるやかな形状を有する。器表面は磨耗しているが、内面に砂粒の動きは観察できず、指頭圧痕がみられる。色調はにぶい黄橙色を呈し、精良な胎土（次山1993）は用いていない。古墳出土資料としては、兵庫県神戸市西求女塚古墳の墳頂部から出土した小型壺（安田編2004）が関連する資料として挙げられる。

40・41は「く」の字に屈曲する破片であり、屈曲部が約1/3残存している40は径3.0cmに復元できる。大阪府豊中市島田遺跡6次調査SK-27（柳本2005）、兵庫県尼崎市田能高田遺跡SH102、SK217（甲斐編1997）から出土した小型器台、京都府木津川市平尾城山古墳（近藤編1990）から出土している稜をもたない鼓形器台などが復元候補となる。どちらも風化が著しいために器面の調整痕跡が見出せないが、ミガキ手法は用いられていないものと判断している。色調黄橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含むものではないが、精製器種ではない。42は南クビレ部2007-2トレンチから出土した布留式土

器の口縁部の破片である。口縁端部は、内側に肥厚させて丸みをもち、器壁は0.6cmと厚手である。器種は直口壺か甕が候補にあがるが、残存状況のためにこれ以上絞り込むことはできない。器面が磨耗しているが、一部赤彩を施した痕跡がみられる。

資料の残存状況が悪いため、土師器から長尾山古墳の時期を推し量ることは困難な状況である。ただ、以上に述べた特徴から、西撰7様式（森岡・竹村2006、布留0式から1式期）に位置づけることが可能であり、小礫群が古墳に関連するものであることがわかったことは1つの成果である。

同様に墳頂部やクビレ部から土師器片が出土したことは、古墳墳丘上で執り行われた祭祀の手がかりを得たと評価できよう。阪神間では、神戸市西求女塚古墳（安田編2004）、同白水瓢塚古墳（安田編2008）など墳頂部から土器を出土した前期古墳が知られている。猪名川流域では長尾山古墳が初例となるものであり、今後、埋葬施設の特徴などをあわせて、その意義について考えていきたい。（中久保）

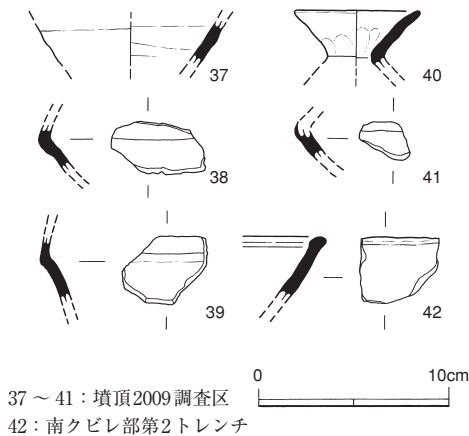


図18 長尾山古墳出土土師器実測図

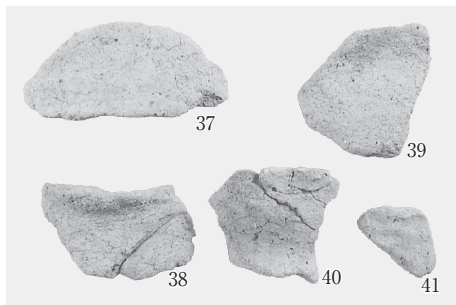


図19 長尾山古墳出土土師器写真

第4章 調査のまとめ

長尾山古墳第2次、第4次調査は、墳丘の残存状況・範囲・形態・時期などの確認がおもな目的であった。墳丘の範囲は、前方部については前方部2008-1トレンチにおいて1段目基底石を約4.4mにわたって検出することができ、これにより前端のラインがほぼ確定した。

後円部後端は、大阪大学による第1次調査の後円部2007-4トレンチにおいてややずり落ちた葺石群を検出しているため、ある程度の位置を復元的に推定できるが、原位置の基底石としてはとらえられていない。現在の山手台南公園から墳丘部に至る通路部分は、公園設置時に後円部斜面を埋めて造成されているので、この部分を掘削すれば本来の後円部裾部をとらえられる可能性はあるが、埋土が深いこともあって、果たせていない。現時点では、後円部2009調査区と南クビレ部2008調査区で検出された一段目基底石、後円部2007-4トレンチ転落葺石群を通るような円周を想定して、およそ径25mの後円部を復元するのがもっとも妥当であろう。これによれば墳丘長は約40mとなる。

墳丘形態は、南クビレ部2008調査区においてクビレ部から弧状にラインを描いて延びる葺石基底石列が明瞭に検出されたので、前方後円墳と確定した。後円部2009調査区で確認された一段目の基底石列も、上述のように復元した後円部裾の円周上に無理なく位置づけることができる。

クビレ部から前方部にかけての形状については、北クビレ部の位置が確定できていないので、若干の不確かさが残る。墳丘主軸の取り方によっては微妙に変動が生ずるが、第2章で示したように、前方部2008-1トレンチで検出された前方部前端の基底石ラインに直交する方向で主軸を考えるなら、前方部ラインはクビレ部の屈曲点からすぐに開くのではなく、クビレ部からしばらく内向き気味に延びた後に、徐々に開きを強めていく形状に復元できる。つまり、後円部と前方部の接点に「接続部」を持ち、前方部がバチ形に開くタイプとの類縁性がうかがわれるのであり、前方後円墳としてはかなり古相の形態を呈しているともみることができよう。

墳丘斜面の段築構造は、前方部については二段築成と理解してよかろうが、後円部は二段築成か三段築成か確定できていない。南クビレ部2008調査区の西端の一部を墳丘上方へと拡張した部分では、葺石は流失して認められなかったものの、人為的な造作の可能性のある地山の緩傾斜面を確認できた。この地山平坦面が二段目テラスの痕跡であると考えれば、後円部は三段築成ということになる。

後円部北側斜面においてこの点を追求するために設けた後円部2009調査区では、墳頂近くまで葺石が認められたが、二段目テラスの存否を検討できる位置では残存状況が悪く、段築構造を確認するには至っていない。2009年度は樹木に配慮して調査区の拡張を行わなかったため、後円部上半部の構造解明については課題として残されており、今後補足調査を行うことも視野に入れておきたい。

第3次、第5次調査として大阪大学が実施した後円部墳頂部の平面精査では、墳丘主軸に斜交して南北方向に延びる長さ3.5m、幅0.7～0.8mの狭長な小礫の広がりを検出しており、礫群中からは古墳時代前期の土師器小片が多数出土した。小礫群を除去した面では、小礫群とほぼ同じ範囲にしまりの悪い堆積土が認められたため、小礫群は木棺などの腐朽によって生じた溝状陥没坑の埋土上層に含

まれていると判断した。つまり、この小礫群は葬送儀礼終了時に墓壙上または墳頂部を覆っていた小礫が、木棺陥没後に落ち込んで残存したものと理解できるのである。

この埋葬に伴う墓壙掘形は、およそ南北長7.8m、東西幅5.2mの隅丸方形のラインとして検出されている。発掘調査に先立って行った電気探査、地中レーダー探査において、ほぼ同じ位置で異なる反応を示す部分が確認されたこととも整合的である。ただ、樹木保護の関係で精査ができていない部分が一部にあり、今後の課題として残されている。墓壙内西部には径1.4～1.6mの楕円形の範囲で土質の異なる部分があり、盗掘坑の可能性がうかがわれるが、内部を完掘していないので確定には至っていない。

埋葬施設の構造については、陥没坑が存在すること、盗掘坑の可能性のある付近からも石材や精良な粘土が確認できないことなどを勘案すると、兵庫県朝来市城ノ山古墳（櫃本・山本他1972）に見られるような、長大な木棺の直葬などが候補にのぼるだろう。波文帯鏡群を含む舶載三角縁神獣鏡3面、魏鏡3面、碧玉製品などを副葬した城ノ山古墳とは、時期的にも隔たりは小さい。また、長尾山古墳において墳丘主軸に斜交させて南北方位の埋葬施設を設けている点は、京都府木津川市椿井大塚山古墳（樋口1998）、滋賀県東近江市雪野山古墳（福永・杉井編1996）など、前期でも古相の古墳に類例があり、そうしたあり方との関連が考えられるかもしれない。

古墳に伴う出土遺物としては、円筒埴輪と土師器があげられる。円筒埴輪はいわゆる「受口状突帯」を有するものである。類例が奈良県天理市東殿塚古墳、大阪府柏原市玉手山9号墳などきわめて限られていることからみて、長期間にわたって各地でこの手法が維持されたとは考えにくい。長尾山古墳例は、受口の屈曲や突出の度合いがやや緩やかになっているので、これらの例にいくぶん後出する可能性はあるが、大局的には同じ段階、すなわち古墳時代前期前半におさまる古墳と理解しておくのが妥当であろう。土師器については、細片が多いために厳密な時期を絞り込むことはできないものの、上述の埴輪の編年観と齟齬を来すものではない。

このように、小規模ながらも二段以上に築成され、葺石、埴輪を施す長尾山古墳は、初期大和政権中枢の古墳づくりと共通する要素を持っているといえる。前期前半の範疇でとらえられる埴輪の特徴からすれば、西摂の代表的な前期古墳として知られる兵庫県宝塚市万籟山古墳よりもやや古い築造時期が想定され、猪名川流域で最初に築造された前方後円墳であった可能性が高い。言い換えれば、長尾山古墳はこの地域で初期大和政権の葬送儀礼をいち早く採用した首長墳であることを意味しており、政権と猪名川流域との連携が長尾山の被葬者の活動をきっかけに、西暦300年前後には早くも成立していたと考えることができるのである。

今回の一連の調査によって、これまで複数の異なった見解があった長尾山古墳の墳形、時期を明確に把握できたことは、猪名川流域の古墳時代史に重要な新情報を提供したといえる。墳丘構造については、上述したように二段目以上の状況がなお不明瞭な点がある。今後に残された課題と考えておきたい。長尾山古墳の調査は、市教委と大学が共同で文化財の調査・研究・活用に取り組んだという点で、文化財行政の可能性を探るテストケースにもなっている。今後も、双方のメリットを生かしつつ、協力して事業を継続していく所存である。

（福永・吉田）

参考文献

- 石野博信 1986 「回想・宝塚市長尾山の古墳調査」『市史研究紀要たからづか』3、宝塚市史編集室
- 甲斐昭光編 1997 『田能高田遺跡』兵庫県教育委員会
- 近藤喬一編 1990 『京都府平尾城山古墳』山口大学人文学部考古学研究室
- 次山 淳 1993 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号、考古学研究会
- 富田尚夫編 2007 『今治市相の谷1号墳出土遺物』愛媛県歴史文化博物館
- 直宮憲一編 2007 『国指定史跡中山荘園古墳保存整備事業報告書』宝塚市教育委員会
- 橋本 久 1975 「古墳は語る」『宝塚市史』第1巻、宝塚市
- 樋口隆康 1998 『昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告』京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第20集、山城町教育委員会
- 櫃本誠一 1971 「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集、兵庫県教育委員会
- 櫃本誠一・山本三郎他 1972 『城の山・池田古墳』、和田山町教育委員会
- 藤田和尊・木許守編 2001 『鴨都波1号墳調査概報』学生社
- 福永伸哉 2004 「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書、大阪大学文学研究科
- 福永伸哉編 2008 『長尾山古墳第1次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室
- 福永伸哉編 2009 『長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室
- 福永伸哉・杉井健編 1996 『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会
- 松本洋明・青木勘時編 2000 『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006 「摂津地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 森岡秀人・西村歩 2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 森岡秀人・吉村健 1992 「摂津」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社
- 森本 徹 1992 『山本奥古墳群 C支群・H支群発掘調査報告書』山本奥古墳群調査団・奈良大学考古学研究室
- 安田滋編 2008 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 安田滋編 2004 『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 安村俊史編 2001 『玉手山古墳群の研究I－埴輪編－』柏原市教育委員会
- 柳本照男ほか 2005 「古墳時代」『新修豊中市史』考古、豊中市史編さん委員会
- 横地 勲 2008 「古墳築造の土量算定と所要労働量の推定」『長尾山古墳第1次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室
- 米田敏幸 2008 「畿内の前半期古墳と古式土師器－出土位置の類型化とその意義－」『王権と武器と信仰』同成社

